

現代文問題集 第二冊

物語と表現を読む

標準・心情から主題へ

改訂完成版

和会塾

目次

章題の右に、本文・設問・解答を含む各章の開始頁を示しています。

第一章	星が降りた日	4
第二章	食卓の記憶	14
第三章	石の時間、木の時間	24
第四章	路地の風	34
第五章	白い浜にて	44
第六章	二つの地図	55
第七章	廃坑の声	66
第八章	稜線の灯	77
第九章	贗作の真実	87
第十章	学校と未来	99
奥付	書誌・利用について	112

本冊の使い方

この冊子で身につける力 根拠の範囲を自分で見定め、離れた箇所を関係づけ、本文の限定を保って説明する。

- 一 読む 本文を通して読み、人物の行動、会話、表現の反復、具体例と結論の関係に印を付ける。
- 二 解く 選択問題では、本文に合う部分だけでなく、主体・範囲・程度・限定まで比べる。記述問題では、必要な根拠を二箇所以上から選び、その関係を言葉にする。
- 三 確かめる 解答・解説の「根拠」「必要要素」「組み立て方」を確かめ、自分の答案に不足や言いすぎがないかを点検する。

- 四 直す 模範解答を写すだけでなく、自己採点の観点を用いて一度書き直す。別解例は、同じ要件を別の言葉と順序で満たす例として読む。

任意課題は、考えを広げる発展課題です。一つに定まる正解はなく、個人的な経験を無理に書く必要もありません。

第一章 星が降りた日

この章で身につける力 行動と会話を手がかりに心情を読み、確かめられた事実と、経験が人に与える意味とを分けて説明する。

夜明け前、拓海は窓をたたき音で目を覚ました。雨かと思ってカーテンを開けると、空は晴れていた。そのとき、屋根の向こうを白い線が斜めに走り、途中で緑色にほどこけた。音は少し遅れて来た。遠くで戸を強く閉めたような、低い響きだった。

拓海は机の時計を見た。四時四十七分。忘れないようにノートへ時刻を書き、見えた方角を窓の絵に矢印で記した。もう一度光るかもしれないと思って待ったが、空は何事もなかったように薄くなっていった。

書いた数字を見ているうちに、眠気が消えた。見たものに名前が付けられなくても、見た時刻だけは今なら残せる。そのことが、拓海には急に大切に思えた。

朝食のとき母に話すと、「流れ星じゃない」と言われた。そうかもしれない。けれど、線が途中で砕けたことと、遅れて音が届いたことが、拓海の頭から離れなかった。

登校前、犬の散歩をする人の姿が増えたころ、拓海は光の消えた方角へ歩いた。落ちた場所が分かるはずはない。それでも、いつもの空き地の隅に、前日にはなかった黒い石を見つけた。親指ほどの大きさで、表面の一部が薄く光っている。

拓海は手を伸ばしかけ、止めた。拾ってしまえば、最初にどこにあったかを後から示せない。携帯電話で石と周囲を数枚撮り、道路と石の位置が分かるように一歩下がっても撮った。地図には印を付けた。母に連絡すると、登校に遅れないと言われたあと、「動かさずに待って」と返事が来た。

昼休み、拓海は写真を佳乃に見せた。佳乃は画面を二本の指で広げ、黒い石の縁を眺めた。「隕石だったら、名前が付くのかな」

「まだ分からない。工事で出た石かもしれない」

「じゃあ、分からない間だけ宇宙の石？」

からかわれたと思い、拓海は画面を伏せた。佳乃はすぐに笑うのをやめた。

「そうじゃなくて。本物じゃなかったら、今朝の空まで見なかったことになるのかなって」

拓海は答えなかった。石を見つけたときから、判定が出れば今朝の出来事に丸が付くような気がしていた。反対に違えば、早起きして空き地まで歩いた自分だけが残るようなもの思えた。

*

放課後、理科の小野先生と母とで空き地へ戻った。先生は写真と地図を確かめ、清潔な袋を手袋の上から持って、石を小さな容器へ収めた。

理科室で先生は、石を拡大して見せた。黒い皮のような部分はあるが、それだけで隕石とは言えないという。磁石への反応も、地上の石や人工物に同じものがあるため、決め手にはならない。

「学校で分かるのは、候補から外せる特徴があるかどうかまでだ。外見だけで本物と決めることはできないよ」

先生は地域の博物館へ写真と発見場所の記録を送り、必要なら専門の研究機関につないでもらうと説明した。

「落ちるところを見たのに、分からないんですか」

「見た光と、この石が同じ出来事だという証拠も、まだないからね」

先生の言葉は冷たくなかった。ただ、拓海が一本につないだ線を、確かめられたところごとに切り分けていた。

一週間後、博物館から連絡が来た。石には人工物の可能性を示す気泡があり、写真だけでは確定できないが、隕石である可能性は低いという。必要なら現物を詳しく調べることはできる、とも書かれていた。

拓海はメールを二度読んだ。「違う」と書かれていないことより、「低い」という言葉の方が目に残った。

「がっかりした？」と佳乃が聞いた。

「少し。いや、かなり」

「そっか」

佳乃は励まそうとせず、窓の外を見た。放課後の空は雲が多く、星はまだ一つも見えない。

「でも、時刻も方角も覚えてるんでしょ」

拓海はノートを開いた。四時四十七分という数字の横に、急いで描いた窓と矢印がある。石が何であっても、その記録は変わらない。あの光と音については、別の人の観測記録が見つかれば分かることが増えるかもしれない。

その夜、拓海は博物館の観測情報を調べた。同じ時刻に広い地域で明るい流星が見られたらしい。ただし、どこかに破片が落ちたかは分かっていなかった。

窓を開けると、冷えた空気が入ってきた。宇宙から来た石は机の上にはなかった。それでも、遠い場所から飛んできた小さな物質が大気に触れ、光になり、それを自分が見た可能性は残っている。地上で生まれた石を宇宙のものと思い込んだ自分も、同じ朝の中にいる。

拓海はノートに新しい線を引いた。分かったこと、まだ分からないこと、その朝に感じたこと。三つの欄を作り、最初の欄に観測情報を書いた。最後の欄には少し迷ってから、「空が急に遠くなくなった」と記した。

設問

問一 表現の意味

小野先生が、拓海の「一本につないだ線を、確かめられたところごとに切り分けていた」とは、どのようなことか。最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 拓海の観察記録には誤りが多いため、先生が光を見た時刻と石の発見場所を、正しい内容へ一
つずつ書き換えたこと。

イ 光を見たこと、石を見つけたこと、両者が同じ出来事かということを、証拠の有無に応じて分
けたこと。

ウ 学校では隕石を詳しく調べられないため、先生が拓海の観察と石の判定を、すべて博物館へ任
せたこと。

エ 石が人工物だと先生には分かっていたため、拓海を失望させないように、光との関係を段階を追
って説明したこと。

解答 「 」

問二 心情

博物館からの連絡を読んだ拓海的心情として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 隕石ではないと完全に否定されなかったため、石が本物だと信じる気持ちをいっそう強めてい
る。

イ 専門機関でも石の正体を判定できないことに腹を立て、これ以上調べ続ける意味を見失ってい
る。

ウ 佳乃の言葉どおり石の正体は重要でないと考え、判定に期待した自分を恥ずかしく思っている。

エ 隕石である可能性が低いことに落胆しながら、確定できた記録と未確定な事柄を見直そうとし
ている。

解答欄 (75点)

解答・解説

本文の流れ

光の観察 拓海は空を走る光を見て、時刻と方角を記録する。

石の発見 空き地の黒い石を撮影し、発見場所を動かさずに残す。

確認の過程 先生は、外見だけでは判定できず、光と石の関係も未確定だと説明する。

連絡のあと 落胆した拓海は、確定した観測、未確定な点、自分に生まれた意味を分けてノートへ記す。

問一 表現の意味

正答 イ

根拠 先生は、石の外見だけでは隕石と決められず、「見た光と、この石が同じ出来事だという証拠も、まだない」と述べる。

解説 拓海は、光を見たことから石の発見までを一つの出来事として捉えていた。先生は、観察できた二つの事実と、その関係についての推測を、証拠の範囲に沿って分けている。

誤答のずれ アは記録の訂正、ウは判断の全面委任、エは先生が人工物と知っていたとする点が本文にない。

☆自己採点の観点

□ 何と何を「一本」につないでいたのか、直前の会話から捉えたか。

□ 事実を否定したのではなく、事実、どうしの関係を未確定としたことを確認したか。

問二 心情

正答 エ

根拠 拓海は「少し。いや、かなり」と落胆を認める一方、佳乃の問いを受け、ノートの記録や別の観測情報へ目を向ける。

解説 拓海は石の判定を気にしなくなったのではない。可能性が低いことには失望しながら、石の正体だけで朝の経験全体を決めない見方へ移り始める。

誤答のずれ アは「低い」を本物の根拠にし、イは調査をやめるとし、ウは石の正体を重要なものにしていく。

☆自己採点の観点

- 落胆と、その後に調べ直す行動の両方を説明できる選択肢を選んだか。
- 「違う」と確定したのでも、「本物」と期待し続けたのでもないという限定を保ったか。

問三 結末の働き

正答 ア

根拠 拓海は「分かったこと、まだ分からないこと、その朝に感じたこと」の三欄を作り、観測情報と自分の感覚を別々に記す。

解説 三欄は、科学的な確認を捨てず、同時に個人的な経験の意味を判定の代わりににも用いやすい整理である。第一場面の一列の記録から進んだ姿が表れる。

誤答のずれ イは記録を軽視する点、ウは人物の正しさを競う点、エは石と光の関係を証明したとする点がずれる。

☆自己採点の観点

- 結末の行動を、その場だけでなく冒頭の記録や途中の落胆とつないだか。
- 三つの欄が、それぞれ何を分けているかを捉えたか。

問四 心情の変化（50字以内）

設問の意図 拓海の変化を、判定への期待と、証拠の範囲を区別する姿勢との対比で説明する。

根拠 昼休みには判定が朝の出来事へ「丸」を付けると感じ、結末では三つの欄を作っている。

必要要素 ①初めは石の判定で経験全体が確かになると思う。②後には確定・未確定・感情を分けて確かめる。

組み立て方 「初めは」と思ったが、後には「した」と前後を対にする。

模範解答

初めは石の判定で朝の経験全体が確かになると思ったが、後には事実と推測、感情を分けて捉えた。（45字）

別解例① 石が本物なら体験も確かになると考えていたが、後には確定した事実と未確定な関係を区別した。(44字)

別解例② 判定が経験の価値を決めると思っていたが、調査後は分かったことと感じた意味を別々に記録した。(45字)

☆自己採点の観点

□ 変化の前と後を両方示したか。

□ 「確かめなくてよい」と変わったのではなく、確かめる対象を分けたと書いたか。

□ 50字以内の一文にまとめたか。

答案で注意したい点 「石が本物でなくても感動は残った」だけでは、拓海が証拠を確かめ続けたことを説明できない。

問五 経験の意味(75字以内)

設問の意図 石の判定、空の観測、個人的な意味を混同せず、佳乃の問いが結末へどうつながるかを説明する。

根拠 広い地域で明るい流星が観測された一方、空き地の石との関係は未確定であり、拓海は「空が急に遠くなくなった」と記す。

必要要素 ①石は隕石の可能性が低く、光との関係も未確定。②光を見た記録は残る。③宇宙を身近に感じた経験の意味も消えない。

組み立て方 「〓は確定しないが、〓は確認され、〓という意味は残る」と限定を保つ。

模範解答 石が隕石か、光と関係するかは確定しないが、同時刻の流星観測は確認され、宇宙を身近に感じた朝の意味も判定だけでは消えないと受け止め直す。(67字)

別解例① 黒い石は隕石の可能性が低くても、明るい流星を見た記録は確かに残るため、空が遠くなくなったという朝の経験の価値まで失われなと考え直す。(67字)

別解例② 石と光が同じ出来事かは分からない一方、実際に光を観察した事実は確かなので、宇宙へ想像を広げた朝まで無意味になるわけではないと捉える。(66字)

☆自己採点の観点

□ 石と光の関係を、確定したこととして書かなかったか。

□ 観測された事実と、拓海の内側に生まれた意味の両方を示したか。

□ 75字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「石は偽物だった」と言い切ると、博物館が示した「可能性は低い」という範囲を越える。

第一章の学び 確かめられた事実、関係についての推測、経験の意味を分ける。分けることは、感動を否定することではなく、言える範囲を明確にすることである。

第二章 食卓の記憶

この章で身につける力 複数の具体例に共通する働きを捉え、比喩と文章構成を手がかりに、筆者の考えを限定を保ってまとめる。

段落番号は編集上付した補助記号で、本文の一部ではありません。

① 祖母の家の台所には、小さな糠床があった。夏休みに泊まると、祖母は朝いちばんにふたを開け、糠を底から返した。私はその匂いが苦手で、漬物にもほとんど箸をつけなかった。それなのに今、八百屋で胡瓜の青い匂いをかぐと、祖母の指についた糠と、窓から差していた白い光を思い出す。好きだった味が戻るのではない。むしろ、避けていたものを含んだ台所全体が戻ってくる。

② 食べ物は、過去を保存する箱だと言われることがある。けれど、箱ならば中身は同じ形で取り出せるはずだ。記憶はそうではない。祖母の糠漬けを今作っても、同じ朝が再現されるわけではない。家は建て替えられ、祖母はもういない。私自身も、食べずに逃げた子どもではない。それでも、匂いや手触りは、過去へ向かう扉の取っ手になる。扉の先に現れるものは、そのときの自分によって少しずつ違う。

③ 冬になると、父は鍋の最後にうどんを入れた。だしの量を見ずに入れるので、たいがい薄くなった。母は文句を言いながら醤油を足し、私と弟は、どちらの側につくでもなく湯気の向こうで笑った。父が料理上手だったという話ではない。今でも鍋のあとのうどんを見ると、味より先に、誰が何を言ったかが浮かぶ。食卓では、料理と会話が別々に記録されるのではなく、一つの場面として結びついていたのだろう。

④ 一方、家族と結びつかない食の記憶もある。学生のころ、初めて一人で遠い町へ行き、朝の食堂で固いパンと酸味の強いスープを食べた。特別に美味しいとは思わなかった。言葉が十分通じず、注文が合っているかも不安だった。ところが、帰国後に似た香辛料の匂いをかぐと、知らない通りへ出たときの心細さと、どこへでも歩ける気がした解放感が同時によみがえった。食べ物が思い出させるのは、安心だけではない。

⑤ 友人の真理は、亡くなった父親が作っていた豆のスープを再現しようとしている。材料は聞いていたが、分量は残っていない。何度作っても「あの味とは違う」と言う。私はあるとき、似た味に近づくほどつらいのではないかと尋ねた。真理は、「同じにはならないから作れる」と答えた。鍋をかき混ぜる時間には、父親の味を探すことと、自分の家の味を決めることが、重なりながらも区別されているらしい。

真理の娘は、父親のスープを食べたことがない。それでも、母親が豆を水へ浸す夜を知り、翌朝に鍋のふたを開ける役を楽しみにしている。祖父の記憶を直接共有しているわけではないが、料理をめぐる新しい記憶には参加している。受け継がれるのは、最初の場面と同じ記憶ではなく、前の世代について語りながら作る、別の時間でもある。

⑥ この話を聞いてから、私はレシピを楽譜に似たものだと考えるようになった。楽譜は音の高さや長さを示すが、演奏する場所や人が変われば響きも変わる。レシピも、材料と手順を人から人へ渡すことはできる。しかし、台所の明るさ、食べた相手、その日の気分までを書き尽くすことはできない。同じ手順で作れば同じ記憶が生まれる、というわけではないのである。

⑦ それでも、レシピが役に立たないのではない。真理は父親の手順を手がかりにしながら、塩を減らし、季節の豆を加えた。変えた部分をノートへ書き、今度は自分の娘にも作り方を教えている。受け継ぐとは、過去を凍らせて運ぶことではなく、何を残し、何を今の暮らしに合わせるかを選び直すことなのだろう。

⑧ 食と記憶について語るとき、「家庭の味」や「郷土の味」という言葉は便利である。ただ、その言葉で一人ひとりの経験を同じにしていけない。同じ料理を囲んでも、ある人には安心が、別の人には緊張が残ることがある。家族で食べる機会が少なかった人もいれば、一人の食事に自由を感じる人もいる。特定の料理を、ある国や地域の人なら誰もが懐かしむものとして扱うこともできない。

料理の名前が同じでも、材料や作り方は家庭ごと、時代ごとに変わる。共通の名は経験を語り始める助けにはなるが、その名だけで一人の記憶を説明し終えたことにはならない。

⑨ 食べ物そのものに、完成した記憶が詰まっているのではない。匂い、味、手の動きが、場所や人、そのときの感情と結びついて、記憶を呼び起こすきっかけになる。そして呼び起こされた記憶は、現在の自分によって見直される。子どものころ嫌っていた糠の匂いを、今の私は祖母の暮らしを支えた手間としても受け取っている。過去は変えられないが、過去との関係は変わりうる。

⑩ 食卓は、昔の場面をそのまま映す鏡というより、過去と現在が向かい合う場所なのだと思う。料理を口にすれば、失った時間が戻るわけではない。それでも、何を覚え、何を忘れていたかに気づき、受け継ぐものを選ぶことはできる。食べるという日々の行為は、記憶を保存するだけでなく、今の暮らしの中で読み直す機会にもなっている。

設問

問一 比喩の意味

第六段落で筆者が「レシピを楽譜に似たもの」と考える理由として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

- ア 材料や手順を伝えられる一方、作る人や場面によって生まれる経験までは同じにできないから。
- イ 料理も音楽も、正しい手順を守るほど、作った人の個性を消して同じ結果を再現できるから。
- ウ 料理の記憶は言葉で説明できないため、音として表現した方が正確に保存できるから。
- エ レシピも楽譜も、過去に作った本人だけが意味を理解でき、他人へ渡すことができないから。

解答 「ア」

問二 文章構成

第一～第五段落に置かれた具体例の役割として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 祖母と父の例を中心に、家族との食事だけが強い記憶として残ることを、旅先や友人の例と対比して証明する。

イ おいしさの評価が年齢や経験によって変わることを示し、昔と同じ味を正確に再現する方法へ話を進める。

ウ 食が安心だけでなく不安や変化とも結びつく多様な例を示し、記憶を同じ形で保存するという見方を崩す。

エ 家庭料理と旅先の料理を比べ、慣れた味の方が、未知の味よりも強く長く記憶に残るという結論を導く。

解答 「ア」

問三 限定

第八段落で「家庭の味」や「郷土の味」という言葉を用いる際の注意として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 家庭や地域の料理は人ごとに受け取り方が異なり、共通点を持たないため、その名称を一切使わないこと。

任意課題（自由記述）

身近な料理や飲み物を一つ選び、それが呼び起こしうる場面と、現在の立場によって受け止め方が変わりうる点を、90字以内で書こう。自分の経験を明かす必要はなく、架空の例でもよい。

一つに定まる正解はありません。本文の考えを使い、具体例と抽象的な説明をつなげて書く課題です。

解答欄

解答・解説

本文の流れ

祖母の糠床 嫌っていた匂いが、今は台所全体と祖母の手間を思い出させる。

複数の食卓 家族の鍋、旅先の朝食、友人のスープを通し、食が異なる感情と結びつくと示す。

レシピの比喻 手順は渡せても、同じ経験までは再現できないと述べる。

限定と結論 個人差を保ちつつ、食が過去を現在から読み直す機会になるとまとめる。

問一 比喻の意味

正答 ア

根拠 第六段落は、楽譜もレシピも情報を渡せる一方、「演奏する場所や人」「台所の明るさ、食べた相手、その日の気分」によって経験が変わると述べる。

解説 比喻の共通点は、一定の形式を伝えられても、実際に生まれる響きや経験のすべてを固定できないことである。

誤答のずれ イは同じ結果を再現できるとし、ウは記憶を音で保存する話に変え、エは他人へ渡せないとする点がずれる。

☆自己採点の観点

□ レシピと楽譜の両方に共通する働きを答えたか。

□ 「伝えられること」と「同じにできないこと」の両側を捉えたか。

問二 文章構成

正答 ウ

根拠 祖母の例には苦手だった匂い、父の例には会話、旅先の例には不安と解放感、友人の例には喪失と新しい家庭の味が結びつく。

解説 具体例は、食べ物が完成した記憶を同じ形で保存するという考えを崩し、食が人・場所・感情との関係から多様な記憶を呼び起こすことを示す。

誤答のずれ アは家族の例に限定し、イは再現方法が主題だとし、エは慣れた味の優位を導く点が本文にない。

☆自己採点の観点

- 例を一つずつ要約するだけでなく、複数例に共通する役割を捉えたか。
- 安心や懐かしさだけでなく、不安や変化の例も含めたか。

問三 限定

正答 イ

根拠 第八段落は、同じ料理にも安心と緊張があり、一人の食事に自由を感じる人もいると述べる。

解説 便利なまとまりを用いること自体を否定せず、その言葉によって個人の異なる経験をつつへ均すことを戒めている。

誤答のずれ アは言葉の使用を全面否定し、ウは伝統と新しさの区別へ移し、エは一人の経験を除外している。

☆自己採点の観点

- 「便利である」に続く「ただ」の働きを確認したか。
- 言葉を使わないのではなく、一般化しすぎないという限定を捉えたか。

問四 具体例の共通点（60字以内）

設問の意図 二つの異なる例から、食べ物と場面・感情が結びつくという抽象的な共通点を取り出す。

根拠 鍋は父母の会話を、旅先のスープは心細さと解放感を、味より先に思い出させる。

必要要素 ①料理単独ではなく周囲の人・場所・感情と結びつく。②味をきっかけに場面全体が呼び起こされる。

組み立て方 個別の料理名を挙げたあと、「いずれも」で共通の働きを抽象化する。

模範解答

鍋は家族の会話を、旅先のスープは不安と解放感を伴っており、どちらも味が周囲の場面と感情と一緒に呼び起こす点。(54字)

別解例① どちらも料理のおいしさだけが残るのではなく、食べた相手や場所、そのときの感情が一つの場面としてよみがえる点。(54字)

別解例② 家のうどんも旅のスープも、味そのものより、人の会話や場所で抱いた気持ちと結びつき、過去の場面を思い出させる点。(55字)

☆自己採点の観点

□ 二つの例の内容を両方含めたか。

□ 単なる「思い出す」ではなく、食と周囲の場面・感情との結びつきを書いたか。

□ 60字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「どちらも印象深い味だった」では、本文が旅先の料理を特別に美味しいとはしていない点と合わない。

問五 筆者の主張(80字以内)

設問の意図 再現ではないこと、記憶が現在から読み直されること、受け継ぐものを選ぶことを統合する。

根拠 第二段落の箱の比喻、第七段落の選び直し、第九・第十段落の過去との関係の変化。

必要要素 ①料理は過去を同じ形で再現しない。②感覚をきっかけに記憶を呼び起こす。③現在の自分が意味や継承を選び直す。

組み立て方 「くを再現するのではなく、くをきっかけに、現在からくするから」と因果を示す。

模範解答 料理は失った過去を同じ形で再現するのではなく、味や匂いから人・場所・感情の記憶を呼び起こし、現在の自分がその意味や受け継ぐものを選び直す機会になるから。(76字)

別解例① 食べ物に完成した記憶が保存されているのではなく、感覚をきっかけに過去がよみがえり、今の暮らしから過去との関係を見直し、また今後に残すものを選ぶから。(75字)

別解例② 同じ料理でも昔の場面はそのまま戻らないが、人や感情を伴う記憶が呼び起こされ、現在の自分がその受け止め方を変え、次の世代へ渡す内容を改めて考えられるから。(76字)

☆自己採点の観点

□ 「そのまま映す鏡」ではない理由を示したか。

- 過去と現在がどのような関係になるかを書いたか。
- 80字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「食べれば懐かしい思い出が戻るから」だけでは、再現ではないという限定と、現在による読み直しが抜ける。

任意課題（自由記述）

考え方の例 同じココアでも、試験前に一人で飲んだ場面と、後から作り方を変えて友人と飲む場面では、呼び起こす緊張や安心の意味が変わる、と具体から抽象へつなぐ。

☆自己採点の観点

- 料理や飲み物と、場所・人・感情のうち一つ以上を結びつけたか。
- 現在の立場による受け止め方の変化を示したか。
- 個人的な経験を無理に開示せず、80字以内にまとめたか。

第二章の学び 複数の例を並べるだけでなく、共通する働きを抽象化する。同時に、便利な一般語が個人差を消していないかを確かめる。

第三章 石の時間、木の時間

この章で身につける力 時計で測る時間と経験される時間を区別し、具体例・対比・限定をつないで筆者の主張をまとめる。

段落番号は編集上付した補助記号で、本文の一部ではありません。

① 朝、駅へ向かう途中で信号に止められると、わずか一分でも長く感じる。ところが、好きな本を読んでいる一時間は、気づけば終わっている。予定に遅れそうな朝には、信号機の数字が一つ減るたびに意識がそこへ集まる。読書中には時計を見ていなくても、登場人物の言葉や前の場面が心に残り、次の頁へ進む。時計はどの一分も同じ長さとして刻むのに、私たちが受け取る長さは同じではない。こうした経験から、時計の示す時間と、私たちが生きて感じる時間とは、重なりながらも同じものではないと分かる。

② もっとも、時計の時間が不要なわけではない。電車の発着、授業の開始、待ち合わせの約束は、一分を誰にとっても同じ一分として数えることで成り立つ。ある人の一分だけを長く数え、別の人の一分を短く数えるのでは、時刻を約束することはできない。個々の感じ方が違って、いったんその違いを脇に置き、共通の尺度を使うからこそ、私たちは離れた場所にいる人とも行動を合わせられる。

③ しかし、その尺度で経験のすべてを表せるわけでもない。返事を待つ五分には、まだ来ない言葉への期待や不安が入り込む。練習を重ねたあとの五分には、それ以前の失敗や手応えが重なっている。これは単に、楽しい時間は短く、苦しい時間は長く感じるという話ではない。何を経て今ここににいるかによって、同じ出来事の意味そのものが変わるということである。経験の中では、今の一瞬だけが切り離されて存在するのではなく、過ぎたことが記憶として現在に残り、これから起こることへの予想も現在の感じ方を変えている。

④ 音楽を聴く場面を考えると、このことが分かりやすい。一つの音が鳴ったあと、次の音がまったく無関係に現れるのでは、旋律にはならない。前の音の響きをどこかに保ったまま次の音を受け取るから、音どうしがつながって一つのまとまりになる。最後の音を聞くと

きには、それまでの音も同じまどまりの中で聞き直されている。経験される時間も、番号を付けた箱が順に並ぶというより、前後が互いに染み込みながら形を変えていくものに近い。

⑤ 哲学者アンリ・ベルクソンは、このように意識の状態が互いに入り込みながら続くあり方を「持続」と呼んだ。時計は時間を同じ大きさの単位に分け、並べて数える。それに対して持続の中では、悲しみのあとに届いた同じ言葉と、喜びの中で聞いたその言葉とが、同じ内容としては経験されない。前にあったことを含みながら現在が変わるため、各瞬間を完全と同じ単位として取り出せないからである。持続は、ただゆっくり流れる時間の別名ではない。速く感じた時間であっても、前後が分離せず一つの経験を形づくるなら、この特徴を持つ。

⑥ ここで注意したいのは、時計の時間を「偽物」、経験の時間だけを「本物」と決めないことである。時計で測るとは、出来事の個別の違いをいったん離れ、共通する面を取り出す抽象である。地図が道の匂いや足の疲れを載せず、距離や方向を見やすくするのと少し似ている。その抽象があるから、実験の結果を比べたり、仕事の順序を調整したりできる。一方、抽象するときに脇へ置いた違いまで、初めから存在しなかったことにはできない。

⑦ 木や石を眺めることも、人間の尺度を問い直す手がかりになる。公園の落葉樹は春に芽吹き、少しずつ幹を太らせる。石も、風や水、温度の変化を受け、長い間に表面の形を変える。木の変化を一日ごとに、石の変化を一週間ごとに確かめても、差はほとんど見えないかもしれない。ただし、これは木や石が人間と同じように時間を感じているという意味ではない。ここで比んでいるのは意識ではなく、変化を捉えるために必要な時間の幅である。

⑧ 人の一日では動いていないように見える石も、より長い幅で見れば変化している。反対に、ほんの一瞬の表情の変化が、人間関係の中では大きな意味を持つこともある。何も変わっていないという判断は、対象そのものの性質だけでなく、私たちがどの幅で見ているかにも左右される。

⑨ 現代の生活では、限られた時間にどれだけ進んだかが数値で示される場面が多い。数値は比較に役立つが、同じ三十分の学習でも、答えを多く出した時間と、一つの疑問に立ち止まって考えが繋がった時間とでは、残るものが異なる。前者が浅く、後者が深いといつ

も決まるわけでもない。大切なのは、頁数や時間だけでは見えない違いがあると知ることだ。量を測った結果だけで、そこで起きた経験の質まで決めたことにはならない。

⑩ 私たちは、時計を捨てて暮らすことはできないし、その必要もない。ただ、共通の尺度としての時間を、経験の全体と取り違えないことはできる。学ぶのが遅い、立ち直るのが早い、と人を評するときにも、何を同じ単位で比べ、どの過程を脇へ置いたのかを確かめたい。今、自分はどの時間を用いて人や出来事を見ているのか。そう問い直せば、速いか遅いかだけでは捉えられなかった変化にも、少し正確に目を向けられるだろう。

語注 持続——アンリ・ベルクソンが、意識の状態が互いに浸透しながら続くあり方を表すために用いた考え。本章では学習用に要約している。

設問

問一 語句・表現

次の(一) (二)について、本文の意味に最も合うものを、ア～エから一つずつ選べ。

(一) 第二段落「共通の尺度」の意味

ア 一人ひとりの感覚を細かく記録する方法

イ 物事を同じ条件で比べるために用いる基準

ウ 過去の出来事を順番に並べ直す仕組み

エ 変化の速さをできるだけ高めるための目標

(二) 第六段落「抽象」の意味

ア 一つの例をすべての場面へそのまま当てはめること

イ 複雑な内容を感情だけで受け止めて判断すること

ウ 目に見えないものを実際には存在しないと考えること

エ 個別の違いを離れ、共通する面を取り出して考えること

解答 (1) [] (2) []

問二 対比

本文で対比されている二つの時間の説明として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 時計の時間は各瞬間を同じ単位として数え、経験の時間は記憶や予想を含んで前後が重なり合う。

イ 時計の時間は自然に起こる変化だけを測り、経験の時間は人間の行動だけを順序どおりに記録する。

ウ 時計の時間は人によって速さが変わり、経験の時間は誰にとっても一定の速さで進んでいく。

エ 時計の時間は過去の出来事を振り返るために使い、経験の時間は未来の予定を決めるために用いる。

解答

問三 具体例の役割

第七・第八段落で木や石の変化を取り上げる役割として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 木や石にも人間と同じ意識があると示し、持続がすべての物に共通すると証明するため。

イ 自然の変化は時計で測れないと示し、人間が作った尺度を用いるべきでないと主張するため。

ウ 変化の有無は見る時間の幅にも左右されることを示し、人間が用いる尺度を問い直すため。

エ 木と石の変化の速さを比べ、どちらが長く同じ姿を保てるかを明らかにするため。

解答

問四 限定を含む記述（55字以内）

筆者は、時計の時間を社会に必要と認めながら、それだけでは不十分だと考えるのはなぜか。本文の限定を保ち、55字以内で説明せよ。

解答欄(55字)

[illegible]

問五 要約（75字以内）

本文全体を、時計の時間と経験の時間の違い、木や石の例、筆者の結論が分かるように、75字以内で要約せよ。

解答・解説

本文の流れ

第一～第三段落 時計の時間が行動をそろえる一方、経験の全体は表しきれないと問題を示す。
第四～第六段落 旋律を例に持続を説明し、時計の時間も必要だという限定を加える。
第七・第八段落 木や石の変化から、変化の判断は見る時間の幅にも左右されると考える。
第九・第十段落 量と経験の質を区別し、二つの時間を取り違えない見方を結論とする。

問一 語句・表現

(1) 正答 イ

根拠 第二段落では、感じ方の違いを脇に置き、離れた人とも行動を合わせるために用いるものとして述べられている。

解説 「尺度」は、長さそのものではなく、物事を比べたり判断したりするための基準をいう。本文では一分を共通の条件で数える働きを指す。

誤答のずれ アは個人差を記録する点、ウは過去を並べ直す点、エは速度を上げる目標とする点
が、本文の「共通に比べる基準」からずれる。

(2) 正答 エ

根拠 第六段落の「出来事の個別の違いをいったん離れ、共通する面を取り出す」が言い換えになっている。

解説 本文では、各人の一分の感じ方の違いをいったん脇へ置き、同じ一分として数える操作を「抽象」と呼んでいる。

誤答のずれ アは一例の一般化、イは感情だけによる判断、ウは見えないものの否定であり、いずれも共通面を取り出すこととは異なる。

☆自己採点の観点

- 語の一般的な意味だけでなく、前後の説明による言い換えを確認したか。
- 各誤答が、本文のどの関係を別のものへ置き換えているか確かめたか。

問二 対比

正答
ア

根拠 第二段落の「一分を誰にとっても同じ一分として数える」と、第三、第五段落の「過ぎたことが記憶として現在に残る」「互いに入り込みながら続く」を対にする。

解説 アは、時計の時間では各单位を同じものとして扱い、経験の時間では前後の状態が互いに影響するという本文の対比を保っている。

誤答のずれ イは測る対象を自然と人間に分ける点、ウは二つの性質を逆転する点、エは用途を過去と未来に分ける点がずれる。

☆自己採点の観点

- 二つの時間を、速い・遅いだけでなく、分けて数えるか前後が重なるかという違いで捉えたか。
- 一方だけ本文に合う選択肢ではなく、対比の両側が合うものを選んだか。

問三 具体例の役割

正答
ウ

根拠 第七段落は意識と時間の幅を区別し、第八段落で「何も変わっていないという判断」が見る幅にも左右されるとまとめている。

解説 木や石は、持続を証明する例ではない。短い幅では止まって見えるものも長い幅では変わると示し、人間が用いる尺度そのものを問う直す例である。

誤答のずれ アは木や石に人間と同じ意識を認める点、イは時計の尺度を否定する点、エは木と石の優劣を比べる点が本文にない。

☆自己採点の観点

- 具体例の内容だけでなく、その直後にどの考えへつながるかを確認したか。
- 「意識の持続」と「変化を見る時間の幅」を混同しなかったか。

問四 限定を含む記述（55字以内）

設問の意図 時計の時間の必要性和限界を、どちらも落とさずに説明する。

根拠 第二段落の「行動を合わせられる」と、第六段落の「脇へ置いた違いまで、初めから存在しなかったことにはできない」。

必要要素 ①共通尺度として行動や比較に役立つ。②記憶・感情を含む経験の質や個別の違いまでは表せない。

組み立て方 「〳には必要だが、〵までは表せない」とつなぎ、必要性の承認と限界を一文で対にする。

模範解答 時計の時間は行動をそろえる共通尺度として必要だが、記憶や感情が重なる経験の質までは表せないから。(48字)

別解例① 共通の時刻は比較や約束に欠かせない一方、過去を含んで変わる個々の経験までは同じ単位で示せないから。(49字)

別解例② 時計は人々が行動を合わせる基準になるが、各人の記憶や予想が入り込む時間の違いまでは測れないから。(48字)

☆自己採点の観点

□ 時計の時間を不要・偽物とせず、社会に必要な働きを書いたか。

□ 経験の時間について、記憶や感情、個別の質のうち必要な内容を含めたか。

□ 「必要だが〵できない」という限定を保ち、55字以内の一文にしたか。

答案で注意したい点 「人によって時間の感じ方が違うから」だけでは、時計の時間がなぜ必要かという設問の前半に答えていない。

問五 要約(75字以内)

設問の意図 二つの時間の対比、自然物の具体例、限定を含む結論を、関係が分かる形でまとめる。

根拠 第二〜第六段落で二つの時間を区別し、第七・第八段落で見る幅を問い、第十段落で両者を取り違えないと結ぶ。

必要要素 ①時計の時間は共通尺度である。②経験の時間は前後が重なり個別の質を持つ。③木や石の例から見る幅を問い、両者を混同しない。

組み立て方 「一方〳、他方〵」で対比を作り、「例から〳と述べる」で具体例と結論をつなぐ。

模範解答

筆者は、時計の時間が共通尺度である一方、経験の時間は記憶を含むと述べ、木や石の変化を例に見る幅を問い、両者を取り違えない見方を求める。(67字)

別解例①

時計は時間を同じ単位で示すが、経験には過去が重なると筆者は考える。木や石の変化から尺度の幅を問い、二つを混同しないことが大切だと述べる。(68字)

別解例②

筆者は、行動をそろえる時計の時間と、記憶が染み込む経験の時間を区別する。木や石を手がかりに見る幅を問い、共通尺度だけで判断しないよう促す。(69字)

☆自己採点の観点

□ 時計の時間と経験の時間の違いを、対比として示したか。

□ 木や石の例を、単なる自然の紹介でなく、見る時間の幅を問う働きとしてまとめたか。

□ 時計を否定せず、二つを取り違えないという結論を75字以内で示したか。

答案で注意したい点 段落順に例を並べるだけでは、何と何を区別し、木や石の例から何を考えたかが伝わりにくい。

任意課題（自由記述）

考え方の例 発表前に待つ十分と友人と話す十分のように、時計では同じでも、不安や楽しさが重なって経験の質が異なる二場面を選ぶ。

☆自己採点の観点

□ 時計では同じ長さだと分かる二つの場面を示したか。

□ 記憶・感情・予想など、違いを生む理由を本文の考えとつなぎ、90字以内にまとめたか。

第三章の学び 共通尺度の働きを認めただけで、その尺度が脇へ置いた違いを読む。要約でも、対立を単純化せず、本文の限定を残す。

第四章 路地の風

この章で身につける力 動作・会話・感覚表現を根拠に人物関係と心情の変化を捉え、題名と物語全体をつないで説明する。

路地裏の店の朝は、表通りより少し早く始まる。

向かいのパン屋から、焼けた小麦の匂いが細い道を渡ってくる。湊は裏口を開け、手を洗い、白い前掛けを結んだ。八席だけの店で働き始めて八か月。野菜を刻む速さは上がったが、客に出す皿の仕上げは、まだ篠崎に任せきりだった。二か月前、試食用の皿にソースを足しすぎてからは、とくにそうだった。篠崎はそのとき怒らず、「足した理由が味にあるのか、不安にあるのか、分けて考えろ」と言った。その言葉を、湊は注意として覚えていたが、まだ使い方は分からなかった。

「仕込みは、まだ来ていない客への返事だ」

篠崎はそう言って、作業台に新玉ねぎとさやえんどうを並べた。言葉は変わっているが、手元は無駄がない。湊が玉ねぎを薄く切る横で、篠崎は鍋の火を見ながら、洗い終えた器具を一つずつ元の位置へ戻した。

昼の小皿には、火を入れて甘みを出した新玉ねぎと、歯触りを残したさやえんどうを使う。白い玉ねぎの上に豆の緑を置くと、皿の中央だけが小さな庭のように見えた。湊は試作用の皿に二つを盛り、最後に木の芽の香りに移した油を垂らした。一滴では弱い気がして、もう二滴加えた。

「多い」

篠崎は一口食べて、水を飲んだ。

「でも、香りがした方が春らしいでしょう」

「香りが先に答えを言っている。玉ねぎも豆も、口に入る前に終わってる」

湊は皿を引き寄せた。自分では、弱く見える味を香りで助けたつもりだった。篠崎の言葉は、せっかく組み立てたものを一息で崩したように聞こえた。

「捨てますか」

「食べて、どこから先が多いか覚える。出す前の失敗は、まだ材料だ」

湊は残りを口に運んだ。最初に木の芽が広がり、そのあとに玉ねぎが追いかけてくる。自分が春らしいと思った香りは、食材の前へ出て、振り返りもせずに走っていた。

*

開店して間もなく、近所の花屋を営む矢野が、店の奥の席に座った。毎週一度、昼休みに来る客である。今日は店先に飾っていた白い花を一輪、篠崎へ渡した。

「名前は知らなくていい花。まず見て」

「花屋がそれを言うのか」

二人のやり取りに、湊は少し笑った。矢野は知識を試すような客ではない。それでも今日は、試されるのが自分であるように感じられた。

注文が重なり、篠崎の前に伝票が三枚並んだ。湊は皿を温め、注文の順に作業台へ置いた。いつもなら、ここから先は一步下がる。篠崎が盛り付ける手元を見て、空いた器具を洗うのが自分の役目だった。ところが、鍋のふたを開けたまま、彼は湊へ言った。

「最初の小皿、任せる」

「さっきのを、ですか」

「さっきのまま出せとは言っていない」

胸の奥が狭くなった。これは機会なのだから、うまく見せなければならない。失敗すれば、また仕上げから遠ざかる気がした。湊は新しい皿を取り、玉ねぎを盛った。木の芽の油を持ち上げたところで、篠崎の「何を食べてもらいたかった？」という声が背中から飛んできた。

湊は手を止めた。春らしさ、と答えかけて、やめた。朝、火のそばで味見した玉ねぎは、甘いだけではなく、最後にわずかな辛みを残していた。さやえんどうには、噛んだときだけ立つ青い匂いがあった。どちらも、油の香りで説明し直す必要はない。

湊は油を一滴だけ落とし、皿を篠崎へ差し出した。

篠崎は味見をしなかった。けれど、何も見ていないわけではなかった。湊の手元と皿を一度ずつ見てから、皿の端を布で拭き、矢野の前へ運んだ。任されたというより、判断を預けられたのだと、湊は遅れて気づいた。

*

矢野はまず玉ねぎだけを食べ、次にさやえんどうを重ねた。すぐには何も言わない。湊には、フォークが皿に触れる小さな音ばかりが聞こえた。

やがて矢野は、入口の方を見た。扉が開くたび、パン屋の匂いと、濡れた石畳の冷たさが細く入り込んでくる。

「路地を曲がったときの風みたい。最初は甘くて、あとから青い匂いが来る」

湊は、息を吐いた。自分が皿に書こうとした「春」という一文字を、客はもつと長い言葉で受け取っていた。

「皿は、客に届いてから答えが増える」

篠崎は伝票に目を落としたまま言った。

「朝は、答えを一つにしすぎたな」

「はい」

悔しさは残っていた。ただ、失敗を消したい気持ちより、次はどこまで自分で考えられるだろうという気持ちの方が少し大きかった。

そのあとの二皿を、湊は同じ形にはしなかった。鍋の底に近い玉ねぎは甘みが強かったため、一皿には木の芽を使わず、豆の青さを残した。篠崎は何も言わず、空いた皿を湊の側へ寄せた。合図はそれだけだった。

午後の仕込みで、篠崎は指示を一つ減らした。湊が豆の量を確かめると、「矢野さんの皿を見ただろう」とだけ答えた。突き放されたのではない。見たことを、自分の判断へ移せと言われているのだと分かった。朝には狭く感じた作業台が、少しだけ広く見えた。

*

閉店後、湊は作業台を拭き、翌日の仕込み表をいつもの場所へ戻そうとした。紙の下に、新しい欄が増えている。

「明日の小皿——担当 湊」

篠崎はコートを着ながら、店の鍵を差し出した。

「先に来て、段取りを書いておけ。迷ったところには印を付けろ」

何でも一人で決めろということではない。分からなさを隠さず、それでも考えた跡を持つてこいという任せ方だった。湊は鍵を受け取り、金属の重さを手の中で確かめた。朝なら、その重さを試験のように感じただろう。今は、明日へ続く仕事の一部に思えた。

仕込み表の料理名は空欄だった。湊は少し考え、「路地の風」と書いた。その下に、玉ねぎ、さやえんどう、木の芽、と材料を記し、木の芽の横へ小さく丸を付けた。使うかどうかは、明日の味を見て決める。

戸を閉めると、夜の路地を冷たい風が抜けた。昼とは違う匂いがした。湊は鍵をポケットへ入れ、明日のまだ決まっていな皿を思いながら歩き出した。

設問

問一 表現の意味

篠崎の「香りが先に答えを言っている」という言葉の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

- ア 香りによって使われた材料がすぐ分かり、客が料理名を考える必要がなくなっている。
- イ 香りが弱いために季節感が伝わらず、玉ねぎと豆の味だけが目立つ皿になっている。
- ウ 強い香りが食材の味を受け取る前に印象を決め、客が味を見つける余地を狭めている。
- エ 香りと味の方向が一致していないため、客がどちらを先に食べるべきか迷う皿になっている。

解答 「 ー 」

問二 人物像

篠崎の人物像として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

- ア 弟子の失敗をすぐ代わりに直さず、問い返しと役割を通して、自分で意図と修正を考えさせる人物。

- イ 弟子の感覚を信頼して細かな確認や助言をせず、修業の初めから客に出す料理の仕上げをすべて任せる人物。

- ウ 客の好みを何よりも優先し、自分の考えと少しでも異なる場合には、弟子が作った料理を客には出さない人物。

- エ 調理の正確さだけを重んじ、客の受け取り方や弟子が込めた考えにはほとんど関心を示さない人物。

解答 「 ー 」

問三 表現効果

矢野の「路地を曲がったときの風みたい」という言葉が物語全体に与える効果として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

- ア 店の外の風景が料理より価値を持つと示し、湊が店を離れたいと考えるときつけを作っている。
- イ 料理の味を客観的な言葉で確定し、湊の皿には一つだけ正しい説明があると明らかにしている。

ウ 矢野が料理の材料を理解していないと示し、湊と客との知識の差を結末で目立たせている。

エ 味が順に広がる感覚を路地の風景と結び、客の受け取りが皿の意味と題名を生む場面になっている。

解答

問四 心情の変化（80字以内）

最初の試作から矢野へ皿を出すまでに、湊の料理への向き合い方はどのように変化したか。変化の前後と、きっかけに触れて60字以内で説明せよ。

解答欄(60字)

[illegible]

問五 題名と主題（85字以内）

「路地の風」という題名は、湊の成長をどのように表しているか。客とのやり取りと終盤の行動に触れ、85字以内で説明せよ。

解答欄(85字)

[illegible]

解答・解説

本文の流れ

朝の仕込み 湊は香りを重ねた試作を作るが、篠崎から食材の味を隠していると指摘される。
昼の営業 小皿を任された湊は、篠崎の問いを受け、食材そのものを客が味わえる形へ直す。
客の反応 矢野の言葉から、皿の意味は作り手だけで決まらず、客に届いて増えるを知る。

閉店後 翌日の小皿と鍵を任され、湊は迷いも含めて自分で段取りを考える役割を引き受ける。

問一 表現の意味

正答

ウ

根拠 篠崎の指摘のあと、湊は玉ねぎの辛みと豆の青い匂いを思い出し、「油の香りで説明し直す必要はない」と考える。

解説 「答え」は、客が食べながら見つける味の印象を指す。強い香りで作り手の意図を先に示すと、食材から受け取る余地が小さくなるという意味である。

誤答のずれ アは材料当ての問題へ狭め、イは香りの強弱を逆にし、エは食べる順序の迷いへ論点を置き換えている。

☆自己採点の観点

□ 比喩の「答え」が、何についての答えかを前後の場面から捉えたか。

□ 香りが強いという事実と、それが客の受け取りに与える効果を結びつけたか。

問二 人物像

正答

ア

根拠 篠崎は試作の問題を指摘したあと、「何を食べてもらいたかった？」と問い、小皿を湊自身に直させる。終盤でも段取りと迷った箇所を持つてくるよう求める。

解説 篠崎は何も教えないのでも、すべて代わるのでもない。判断に必要な問いと範囲を示し、湊が考えた跡を確かめる形で役割を任せている。

誤答のずれ イは初めから全面的に任せる点、ウは自分と違う料理を出さない点、エは客や弟子の考えに無関心とする点が本文と合わない。

☆自己採点の観点

- 一つの台詞だけでなく、試作、営業、閉店後の複数場面を結んだか。
- 厳しさと任せ方の両方が説明できる選択肢を選んだか。

問三 表現効果

正答 エ

根拠 矢野の言葉のあと、湊は客が自分より「もっと長い言葉で受け取った」と感じ、終盤で料理名に「路地の風」と書く。

解説 この比喻は、甘みから青い匂いへ移る味を路地で感じる風に重なる。同時に、客の言葉が皿の意味を広げ、そのまま題名と次の仕事へつながる働きを持つ。

誤答のずれ アは湊が店を離れるとする点、イは意味を一つに確定する点、ウは客の知識不足を示す点が、本文の展開と反対である。

☆自己採点の観点

- 比喻が表す味の変化と、その言葉が後の場面に及ぼす働きの両方を確認したか。
- 題名が作り手だけでなく、客とのやり取りから生まれたことを捉えたか。

問四 心情の変化（60字以内）

設問の意図 湊が料理を「自分の力を示すもの」から「客が味を見つける余地を持つもの」へ捉え直す変化を、篠崎の問いと結ぶ。

根拠 試作時の「弱く見える味を香りで助けた」と、営業中の「何を食べてもらいたかった？」「油の香りで説明し直す必要はない」。

必要要素 ①初めは香りを重ねて自分の意図を強く示そうとした。②篠崎の問いをきっかけに、食材の味を客が受け取る余地を残そうとした。

組み立て方 「初めはくしたが、くを受けて、くするようになった」とし、前後ときっかけを一文でつなぐ。

模範解答

初めは香りを重ねて自分の意図を示そうとしたが、篠崎の問いを受け、客が食材の味を見つける余地を残そうとした。(53字)

別解例①

香りで春らしさを説明しようとしていたが、師匠に意図を問われ、食材そのものを客が受け取れる皿へ直そうと考えた。(54字)

別解例②

自分の狙いを香りで強く伝えようとした湊は、篠崎の問いから、客が味を発見できるように食材を生かそうと変わった。(53字)

☆自己採点の観点

□ 変化前の「自分の意図を強く示す」向き合い方を書いたか。

□ 篠崎の問いと、客が味を見つける余地を残す変化を結びつけたか。

□ 前後を対にし、60字以内の一文にしたか。

答案で注意したい点 「香りを減らした」だけでは調理操作の説明にとどまる。何のために減らしたかという料理への向き合い方まで示す。

問五 題名と主題(85字以内)

設問の意図 題名が生まれる客とのやり取りと、湊が翌日の役割を引き受ける結末をつなぎ、成長の内容を説明する。

根拠 矢野が皿を「路地を曲がったときの風」と表した場面と、湊が仕込み表に「路地の風」と書き、材料と迷いの印を記す場面。

必要要素 ①客の受け取りによって皿の意味が広がると知る。②料理を相手とともに形づくるものと捉え直す。③迷いを残しながら翌日の役割を引き受ける。

組み立て方 「客の言葉から」と知り、終盤では「した」とつなぎ、題名が気づきと行動の両方を表すようにする。

模範解答

客が一皿に「路地の風」という意味を見つけたことで、湊は料理を相手と形づくるものと捉え直し、終盤では迷いに印を付けながら翌日の小皿を担おうとした成長を表す。(77字)

別解例①

矢野の言葉で皿の意味が客に届いて広がると知った湊が、「路地の風」を仕込み表に記し、分からない点には印を付けて確かめながら翌日の役割を引き受ける成長を示す。(77字)

別解例②

客が味から見つけた「路地の風」を料理名にした湊は、料理を一人で完成させるのではなく、相手に開くものと学び、迷いを抱えたまま次の小皿を担う新たな役割へ進んだ。(77字)

☆自己採点の観点

- 客の言葉によって皿の意味が広がったことを書いたか。
- 終盤の仕込み表・迷いの印・翌日の担当のうち、成長を示す行動を含めたか。
- 題名、気づき、行動を関係づけ、88字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「料理が上手になった」とまとめるだけでは、客の受け取りに開く姿勢と、迷いながら役割を担う成長が表れない。

第四章の学び 心情は台詞だけでなく、手を止める、香りを減らす、印を付けるといった行動に表れる。題名も、本文中で生まれ、結末へ戻る働きを読む。

第五章 白い浜にて

この章で身につける力 「反復される行動と心情の変化を結びつけ、責任を消さずに再出発の可能性を限定して説明する。」

朝の浜では、風が一晩かけて運んだものが、白い砂の上に線を描いていた。細い流木、切れたロープ、色の抜けた包装袋。修司は軍手をはめ、危険物を入れる缶と、ごみ袋を分けて持った。砂の表面を手で払うと、錆びた釘の先が出た。拾い上げ、缶へ落とす。乾いた音がした。

海岸清掃は、市の就労支援所から紹介された仕事だった。刑を終えて町へ戻って三か月、雇ってくれる場所は少なかった。八年前、酒の席で起こした暴力によって一人が亡くなった。その事実、刑期が終わっても終わらない。修司自身が終わらせてよいものでもなかった。

支援所では、仕事を続けることと、過去について説明する範囲は別に相談された。修司は、何も知らない人へ自分から詳しく話すことも、知る必要のある管理者へ隠すことも望まなかった。早苗は必要な情報を管理者から聞いたうえで、作業の安全と勤務の条件だけを修司に確認した。

被害者の家族へは、弁護士を通じて謝罪と賠償の状況を知らせている。返事はない。最初の手紙を書いたとき、返事が来れば自分が少し楽になると期待していることに気づき、便箋を破った。今は、読まれることも許されることも求めない形で、必要な報告だけを送っている。

作業を始めたころ、浜の利用者は修司が近づくと道を空けた。顔を知っている人も、知らない人もいた。視線の理由の一つには決められない。それでも修司には、避けられることを当然だと思いう気持ちと、いつまで続くのかと問いたくなる気持ちが、同じ胸の中にあった。

休憩所には、清掃への感謝を伝える紙もあった。修司は自分に向けられた言葉のように読みかけて、やめた。作業は前任者から続き、早苗や臨時の人も担っている。良い変化を自分だけの成果にすれば、批判だけでなく感謝まで、自分に都合よく受け取ることになる。

現場を担当する早苗は、初日に網袋の使い方を示しただけで、過去については尋ねなかった。

「砂を握ると、小さい破片が見えなくなる。広げて、光を変えて見る」

修司が両手で砂をすくうと、早苗は首を振った。手の中で確かめるのではなく、砂の上へ薄く広げる。朝日を斜めから当てると、透明な破片が光った。

「急いで全部きれいにしようとしな。一日で潮は変わるから」

その言葉を、修司は作業の注意としてだけ聞いた。

*

六月の終わり、浜の端に古い漁網が打ち上げられた。二人で引いても砂に食い込み、動かない。早苗は漁協へ連絡し、持ち主を確かめた。午後、漁師の岡部が来た。

岡部は修司を見ると、足を止めた。亡くなった人の叔父と同じ船に乗っていたことがある、と修司は聞いていた。

「網はこっちでやる」

短い声だった。修司は手を離れた。早苗も何も取りなさなかった。二人は少し離れた場所で、細かなごみを拾った。

帰り際、岡部は裂けた網の一部を持ってきた。

「これは漁には戻せん。切って分別する。刃物は早苗さんが持て」

修司に頼んだのか、早苗に言ったのか分からない。修司は勝手に意味を足さず、早苗の指示どおり網を押さえた。結び目には砂が入り、強く引くほど締まった。手の力を抜き、糸の向きを見て少しずつほごいた。

作業が終わっても、岡部は礼を言わなかった。ただ、余った手袋の束を作業箱へ置いて帰った。修司は、その行動を受け入れの印だとは考えないようにした。明日使える手袋が増えた。それが確かなことだった。

七月、清掃の記録板に、利用者からの意見が貼られた。「浜が歩きやすくなった」という紙の下に、「担当者の人選を考えてほしい」と書かれた紙があった。

修司はしばらくそこに立ち、紙をはがしたい衝動を感じた。仕事と過去は別だと言いたかった。しかし、被害者の近くにいた人が、浜で修司の姿を見たくないと思う可能性もある。

「配置を変えますか」と早苗に聞いた。

「希望は管理者へ伝える。あなた一人で残るとも去るとも決めない。仕事の必要と、利用する人の負担を分けて考える」

「ここで働くのが償いだと思っていました」

早苗は、記録板を見た。

「その言葉を決めるのは、あなたではないでしょう。清掃は清掃として必要です」

修司は返事ができなかった。自分が拾ったごみの量を、失われた命に近づく数字のように数えていたことに気づいた。何袋集めても、二つは釣り合わない。

管理者との話し合いで、修司は人の少ない早朝を中心に担当し、行事の日は別の区域で作業することになった。追い出されたわけでも、認められたわけでもない。複数の人が同じ浜を使うための、今のところの調整だった。

勤務表には、三か月後に配置を見直すと書かれた。決定は永久の評価ではなく、利用者から届く意見と仕事の状況を確認して更新される。修司はその期限を、我慢すれば元に戻る日ではなく、もう一度話し合う日として手帳へ写した。

*

秋の台風のと、浜には大量の枝と網が寄った。修司はいつものように砂を薄く広げ、光を変えて破片を探した。岡部も作業に来た。二人は向かい合わず、同じ網の別の端を持った。

しばらくして岡部が言った。

「強く引くな。結び目が固くなる」

初夏に修司が覚えたことと同じだった。

「はい」

それ以上の会話はなかった。修司は、これを許しの始まりとは呼ばなかった。岡部が何を考えているかは、岡部にしか決められない。けれど、同じ作業を安全に進めるため、互いの手の動きを確かめた時間はあった。

夕方、白い浜には、集めきれなかった細い枝がまだ残っていた。明日になれば、潮が別のものを運んでくる。修司は軍手を外し、手のひらに残った砂を開いた。握れば一つの塊に見える砂も、広げれば粒の間に小さな破片が見える。

過去は、その手から落としてしまえるものではない。今の仕事が過去を洗い流すわけでもない。それでも、見えないものを見えないままにせず、今日するべきことを他人と確かめて行うことはできる。

修司は記録板に、回収できなかった場所と、翌朝必要な道具を書いた。最後に自分の名を記し、消さずに残した。浜を出るとき、振り返らなかった。明日の仕事が続く方角へ、ゆっくり歩いた。

設問

問一 表現の意味

「砂を握ると、小さい破片が見えなくなる。広げて、光を変えて見る」という作業上の言葉が、物語全体で持つ意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 過去の罪について考えず、責任とは切り離して、今できる清掃の仕事だけへ意識を集中する必要を表す。

イ 周囲の人の視線や被害への不安を気にせず、自分の善意を信じて働けばよいという早苗の考えを表す。

ウ 一つの意味で行動を包まず、仕事、責任、他者の反応を分け、見えにくい事実を確かめる姿勢を表す。

エ 浜のごみを多く集めることより、価値のある漂着物だけを見つけ出すことが、清掃の本当の目的だと表す。

解答 「 」

問二 人物の判断

記録板の意見を受けた早苗の対応として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 修司には働く権利があるとして、利用者の負担や不安をすべて偏見と決め、配置を一切変えない。

イ 町の人々の不安を避けるため、修司に清掃の仕事をやめさせることを、早苗が一人で決める。

ウ 修司の反省と善意を信じ、清掃を過去への償いとして町の人に認めてもらえるまで、説明を続ける。

エ 仕事の必要、利用者の負担、修司の配置を別の問題として扱い、関係者との調整を求める。

解答 「 」

問三 結末の行動

結末で修司が記録板に自分の名を「消さずに残した」ことの意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

解答・解説

本文の流れ

早朝の清掃 修司は、浜を清掃することを過去への償いと結びつけて働く。

岡部との作業 互いの意味を決めず、安全に作業するための手の動きだけを確かめる。

意見と調整 利用者の負担も考え、配置を関係者と調整する。早苗は清掃と償いを分ける。

翌日へ 過去が消えないことを認め、許しの証拠を求めず、必要な仕事と責任を記録する。

問一 表現の意味

正答
ウ

根拠 修司は手袋を受け入れの印と決めず、記録板の意見も偏見だけと決めない。結末では、握った砂を広げる行動から、見えないものを確かめる考えへ進む。

解説 作業の注意は、一つに固めた意味では見落とすものがあるという読み方へ広がる。修司は善行、償い、許しを一つの線にせず、別々に確かめるようになる。

誤答のずれ アは過去を見ない姿勢、イは善意だけを信じる姿勢、エは価値ある物を選ぶ目的へ置き換えている。

☆自己採点の観点

- 冒頭と結末に反復される動作を確認したか。
- 作業方法の説明が、人物の考え方とどう重なるかを捉えたか。

問二 人物の判断

正答
エ

根拠 早苗は「あなた一人で残るとも去るとも決めない」と述べ、管理者との話し合いの結果、時間と区域を調整する。

解説 早苗は修司を無条件に守るのでも、利用者の意見だけで排除するのでもない。複数の人が浜を使う条件を、関係者と分けて調整する。

誤答のずれ アは意見を偏見と断定し、イは早苗が単独で解雇し、ウは清掃を償いとして認めさせる点が本文と異なる。

☆自己採点の観点

- 早苗の台詞だけでなく、実際に行われた配置調整まで確認したか。
- 修司と利用者のどちらか一方だけを優先する選択肢を避けたか。

問三 結末の行動

正答 イ

根拠 修司は、過去は手から落とせず、仕事が洗い流すわけでもないと考えたうえで、残った場所と翌日の道具、自分の名を記す。

解説 署名は、善行を示して評価を求める行動ではない。過去を含め、自分が今日したことと次にする責任から逃げない姿勢を示す。

誤答のずれ アは町の承認を得たとし、ウは家族の許しを期待し、エは未回収の責任を一人で負うとする点がずれる。

☆自己採点の観点

- 名前を残す直前の「過去」と「今の仕事」の関係を読んだか。
- 承認や許しが得られた結末ではないことを保ったか。

問四 心情の変化（65字以内）

設問の意図 善行と償いを直結した初めの考えから、釣り合わないものを分けて責任を担う考えへの変化を説明する。

根拠 修司はごみ袋の数を失われた命へ近づく数字のように数えていたが、早苗に「清掃は清掃」と言われる。

必要要素 ①初めは清掃を償いと考え、罪を埋め合わせようとする。②後には両者は釣り合わず、仕事は現在の責任として行うと捉える。

組み立て方 「初めは〜と考えたが、〜をきっかけに、〜と捉え直した」とする。

模範解答

初めは清掃を罪の償いとして数えようとしたが、早苗の言葉から、命とは釣り合わず、今必要な仕事として責任を持つものだと思え直した。（63字）

別解例① ごみを拾えば過去へ近づけると考えていたが、清掃は失った命を埋め合わせず、現在の自分の役割として誠実に続けるものだと考え直した。(63字)

別解例② 浜での善行を償いの証しにしようとしたが、早苗に指摘され、罪は消えず、清掃は他者と調整しながら果たし続ける今の責任だと理解した。(63字)

☆自己採点の観点

□ 修司の考えの前後を両方書いたか。

□ 清掃を無意味としたのではなく、過去を相殺する働きから切り離したと説明したか。

□ 65字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「清掃を続ければ許されると思った」では、後半で修司が許しの印を決めない姿勢と反対になる。

問五 責任と再出発(90字以内)

設問の意図 安易な和解を避け、他者の意思、現在の仕事、継続する責任を統合して主題を説明する。

根拠 岡部の行動を許しと呼ばず、互いの手を確認して作業する場面と、結末の記録板。

必要要素 ①岡部の気持ちを勝手に許しと決めない。②同じ作業に必要な関係は築く。③清掃は罪を消さないが、現在の責任を果たし翌日へつなぐ。

組み立て方 「くを求めるのではなく、くしながら、くを続ける行動」と限定を組み込む。

模範解答 岡部との共同作業を許しの証拠にせず、相手の距離を尊重して必要な手の動きだけを確かめ、罪を消さない清掃を現在の責任として記録し、翌日も続ける行動として描く。(77字)

別解例① 岡部に受け入れられたと決めず、同じ仕事を安全に進める範囲で関係を少しずつ作り、清掃では過去を相殺できないと認めつつ、今日の責任を翌日の行動へつなぐ姿である。(78字)

別解例② 他者の態度を赦しと解釈せず、岡部と必要な共同作業を分かち合い、浜をきれいにしても罪は消えない限界を負いながら、自分の名で仕事を翌日まで継続する姿である。(76字)

☆自己採点の観点

□ 岡部が修司を許したと断定しなかったか。

- 浜の清掃の必要性と、それが罪を消さない限界の両方を書いたか。
- 再出発を、一度の心情ではなく翌日へ続く行動として示したか。
- 90字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「善行によって町に受け入れられた」という結論は、利用者の意見や配置調整、岡部との距離を落としている。

第五章の学び 人物の変化を、救われた・許されたという結果だけで読まない。他者の意思を勝手に決めず、限界を知ったうえで続ける行動に注目する。

第六章 二つの地図

この章で身につける力 同じ出来事を語る二人の記憶を比べ、共有される事実、異なる解釈、語り手に分らないことを区別する。

市立図書館の郷土資料室で、奈緒は二枚の地図を机に広げた。どちらも、駅前通りから旧川端小学校までの道を描いている。赤い線は奈緒が引き、青い線は兄の航平が引いた。線は古いパン屋の前まで重なり、そこから別々の道へ分かれていた。

小学校の閉校記念展に、町の「記憶の地図」を出してほしいと頼まれたのは一か月前だった。同じ場所でも人によって覚え方が違うことを示す展示だという。奈緒が選んだのは、二十年前の九月、激しい雨の日に兄と帰った道だった。

航平は初め、もっと楽しい日の地図にしようと言った。夏祭りの帰り道なら、二人とも同じ橋を覚えている。奈緒が雨の日を選んだのは、正しい道を決めたいからだけではなかった。兄に「置いていった」と言うたび、航平が「戻った」と答え、会話がそこで止まってきたからだ。

奈緒の地図では、二人はパン屋の赤いひさしで雨宿りしたあと、地下道を通り、川沿いへ出ている。途中で奈緒が赤いマフラーを落とし、兄は気づかず先へ行った。奈緒は、暗い地下道に一人残されたと思っている。

航平の地図では、パン屋から坂を上り、郵便局の角を曲がっている。マフラーを探しに戻った印はあるが、地下道は通っていない。

「ここ、工事中だったはずだよ」と航平が言った。

「通った。水が階段まで来っていて、怖かった」

「だから入れるわけないだろ」

航平は青鉛筆で地下道に大きなぼつを付けた。その動作が、奈緒には昔と同じに見えた。自分の話を聞く前に、正しい道を決めてしまう。

「兄ちゃんは先に帰ったから知らないんだよ」

「先に帰ってない。マフラーを取りに戻った」

二人の声が資料室に響き、司書が顔を上げた。奈緒は地図を裏返した。

*

翌週、二人は当時の写真を探した。市の工事記録には、地下道の排水設備を九月に修理したとあるが、日付は月末だけだった。新聞には大雨の記事があり、駅前のバスが迂回したことが書かれていた。どちらも二人が通った道までは示さない。

古いパン屋の店主が残した写真帳には、赤いひさしの下に並ぶ傘が写っていた。端に、小生らしい二人の後ろ姿がある。兄妹だと断定できるほど鮮明ではない。しかし、黄色い靴と、奈緒が使っていた赤いマフラーのような色が見えた。

写真帳の頁には日付がなく、前後の写真から九月ごろと推測できるだけだった。奈緒は、二人に似ているからという理由で、自分たちだと決めそうになった。航平は拡大した画像を閉じ、「似ている、までにしよう」と言った。自分の地図には迷いなくぼつを付けた兄が、資料には慎重だった。

「ここまでは一緒だった」と航平が言った。

奈緒も頷いた。雨、赤いひさし、二人でいたこと。写真が確かめるのはそこまで、その後どちらへ進んだかは写っていない。

資料室の帰り、奈緒は一人で旧道を歩いた。地下道は改修され、壁は明るく塗られている。階段を下りると、雨の日ではないのに水の音が大きく聞こえた。

奈緒が覚えているのは、兄の青い傘が角の向こうへ消えたことだ。呼んでも返事がなく、足元の水が靴へ入った。だが、赤いマフラーをどこで落としたかは思い出せない。地下道だったという確信は、暗さと水の音から後で形を得たのかもしれない。

出口で航平が待っていた。約束はしていない。

「母さんの古い日記があった」と、航平は封筒を差し出した。

その日の頁には、「バスが止まり、二人とも遅く帰る。航平は奈緒のマフラーを持っていた」とだけある。

「ほら、取りに戻った」

「でも、どこへ？」

航平は黙った。日記は、マフラーを拾った場所も、奈緒と離れた理由も書いていない。

「俺は、お前にパン屋で待てと言ったと思う。マフラーが道に落ちたのを見て、すぐ戻った」

「私は聞いてない」

「雨がひどかったから、聞こえなかったのかもしれない」

航平はそう言ったあと、「言ったつもりだっただけかも」と付け足した。

奈緒は、兄の記憶を初めて、言い訳ではなく兄の側から見えた一場面として考えた。だからといって、暗い場所に残された怖さが消えるわけではない。兄が戻った事実があっても、待つよう伝わっていなければ、奈緒にとっては置き去りだった。

「兄ちゃんの地図だと、私がどこにいたか分からないね」

「お前の地図だと、俺が戻った道がない」

二人は地下道の出口で、しばらく二枚の紙を見比べた。

奈緒は、兄が戻ったことを認めれば、自分の怖さを取り消すことになると思っていた。航平も、自分が戻ったと証明できれば、妹を傷つけた記憶から自由になれると思っていたのかもしれない。ただし、それは奈緒の推測であり、航平はそう言わなかった。

閉校記念展の前日、奈緒は新しい一枚を作った。雨の時刻と、写真で確かめられたパン屋までは実線にした。そこから先は、赤と青の点線を引いた。赤い線は地下道へ、青い線は坂道へ向かう。マフラーの印は、どちらの道にも置かなかった。

航平は、二本の点線が再び出会う場所を描こうとした。奈緒は止めた。

「帰った家は同じだけど、途中で会ったかは覚えてない」

「じゃあ、線は離れたまま？」

「その方が、今分かってることに近い」

航平は消しゴムを置き、地図の余白に「母の日記では、二人とも帰宅」と書いた。

展示には、写真と日記の写しも添えた。説明札には、「二人の記憶は、パン屋までは重なります。その先の道と、離れた理由は一致しません」と記した。

開場後、一人の卒業生が地図を長く見て、「地下道はその年、閉鎖されていた気がする」と言った。別の人は、「朝は閉じていたけれど、夕方は通れた」と話した。証言が増えても、すぐ一つの線にはならなかった。

奈緒は、答えが遠のいたとは思わなかった。二人の地図のうち一方を消すより、どこまで重なり、どこから違うかが見えるようになったからだ。

閉館前、航平が赤い点線の横へ、小さな青い矢印を書きかけた。マフラーを探しに戻った道だろう。奈緒は消さなかった。ただ、矢印の先に疑問符を添えた。

「これならいい？」

「今はね」

二人は地図を壁へ戻した。紙の上で線は離れたままだったが、その違いを二人で見ている場所だけは、同じだった。

設問

問一 事実と解釈

二十年前の雨の日について、本文中の資料から確かめられた事実として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 奈緒は地下道でマフラーを落とし、航平はそれを坂道で拾い、雨の中を引き返して奈緒を迎えに帰った。

イ 雨の日、二人らしい子どもがパン屋のひさしにおり、母の日記では二人とも帰宅し、航平がマフラーを持っていた。

ウ 地下道はその日ずっと閉鎖されていたため、奈緒が覚えている帰り道は、後から作られた記憶だと分かる。

エ 雨の日、航平は奈緒へ地下道で待つよう伝えたが、その声は届かず、坂道で拾ったマフラーを持って迎えに帰った。

解答 「 」

問二 語りの限定

奈緒が「地下道だったという確信は、暗さと水の音から後で形を得たのかもしれない」と考えることの意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 奈緒は自分の記憶がすべて誤りで、兄の航平が覚えている帰り道と会話だけが正しかったと認めたこと。

イ 地下道の記憶は怖さから作った空想で、置き去りにされた感情も兄への思い込みにすぎないと考えたこと。

ウ 記憶には後の経験が影響する可能性を認めつつ、怖さや兄との行き違いまで否定せずに見直したこと。

エ 資料より自分の感覚の方が正確だと考え、水の音を根拠にして、地下道を通ったと事実として確定したこと。

解答・解説

本文の流れ

二枚の地図 奈緒は地下道、航平は坂道を描き、離れた理由も異なって記憶する。

資料の確認 写真と日記は一部の事実を示すが、二人の経路や意図は決めない。

記憶の見直し 二人は自分の記憶の限界を認めつつ、当時感じた怖さや戻った行動を否定しない。

一枚の展示 共有できる事実の実線、異なる記憶は点線、未確定な箇所は疑問符で残す。

問一 事実と解釈

正答 イ

根拠 写真は二人らしい後ろ姿をパン屋で捉え、母の日記は二人の帰宅と航平がマフラーを持っていたことを記す。

解説 写真の人物は鮮明でなく、道筋は写らないため、イも「二人らしい」と限定する。複数資料から言える範囲だけを組み合わせている。

誤答のずれ アは二人の道の一つへ合成し、ウは終日閉鎖を確定し、エは航平が地下道で待つよう伝えた経緯を事実として断定している。

☆自己採点の観点

- ☐ 資料が直接示すことと、人物が記憶していることを分けたか。
- ☐ 「二人らしい」という写真の限定を落とさなかったか。

問二 語りの限定

正答 ウ

根拠 奈緒は地下道の確信が後から形づくられた可能性を考える一方、兄が戻っても伝わらなければ自分には置き去りだったと考える。

解説 奈緒は経路の正確さを問い直すが、当時の怖さまで虚偽にはしない。外から確かめられる道と、本人が経験した意味を分ける姿勢である。

誤答のずれ アは航平だけを正しいとし、イは感情まで否定し、エは感覚で経路を確定する点がずれる。

☆自己採点の観点

- 「かもしれないかった」という限定に注目したか。
- 道の記憶への疑いと、怖さの経験を残すことを両立させたか。

問三 結末の表現

正答 エ

根拠 二人は赤と青の点線を残し、航平の矢印には奈緒が疑問符を添える。一方の線を消さず、違いを共同で展示する。

解説 相互理解は、記憶が同じになることではない。不一致の範囲を二人が一緒に見られるようになった点に変化がある。

誤答のずれ アは対話を断念し、イは一方を正しいと決め、ウは記憶が同一になったとする点が本文にない。

☆自己採点の観点

- 「離れたまま」と「同じ」の対比が、それぞれ何を指すかを分けたか。
- 完全な和解や一致に読みすぎなかったか。

問四 11つの記憶（65字以内）

設問の意図 同じ行動が、航平には助ける行動、奈緒には置き去りの経験として受け取られる関係を説明する。

根拠 航平は待つよう言って戻ったと記憶し、奈緒は言葉を聞かず、青い傘が消えたことを覚える。

必要要素 ①航平はマフラーを拾うため戻り、奈緒にも待つよう伝えたと思う。②奈緒には伝わらず、残されたと感じた。

組み立て方 「航平には」だが、奈緒には」と同じ出来事の意味を対比する。

模範解答

航平は奈緒を助けるためマフラーを探しに戻り、待つよう伝えたと思うが、奈緒には言葉が届かず、兄に置き去りにされた経験として残った。（64字）

別解例①

航平にとっては落としたマフラーを拾うための行動だった一方、奈緒には説明が聞こえず、暗い場所に一人残された出来事として記憶された。(64字)

別解例②

兄は奈緒のために戻り、待つ指示もしたつもりだが、妹には当時それが伝わらず、兄の傘が消え、自分だけ残された経験として受け止めている。(65字)

☆自己採点の観点

- ☐ 航平の行動と奈緒の受け止めを両方書いたか。
- ☐ どちらか一方を嘘や間違いと決めなかったか。
- ☐ 65字以内にまとめたか。

答案で注意したい点

「二人は誤解していた」だけでは、何をどう異なって受け止めたかが伝わらない。

問五 題名と主題(90字以内)

設問の意図 地図上の線の種類と、証拠・記憶・未解決の関係を対応させ、理解の変化を説明する。

根拠 写真等で共有できる部分は実線、二人の異なる経路は点線、航平が戻った道には疑問符を添える。

必要要素 ①実線は共有できる事実。②点線は異なる記憶。③疑問符は未確定。④一方を消すのではなく、違いを共同で見られるようになる。

組み立て方 各記号の意味を短く示し、「〽る理解へ変化した」とまとめる。

模範解答

資料から共有できる事実を実線、異なる経路の記憶を点線、確定しない兄の動きを

疑問符で残し、一方を正解にして他方を消すのではなく、不一致の範囲を二人で確かめる理解へ変化したことを表す。(90字)

別解例①

重なる記憶だけを実線にし、それぞれ食い違う道は二色の点線、分からない箇所は疑問符にすることで、事実と解釈を分け、完全には記憶が一致しなくても違いを共有できるようになった姿を示す。(89字)

別解例②

実線は資料で確かめられた共通の範囲、点線は二人それぞれの記憶、疑問符は今も未解決の部分を示し、過去を一つへ直すのではなく、異なる経験を残したまま共に見直す関係へ進んだことを示す。(88字)

☆自己採点の観点

- 実線・点線・疑問符を、それぞれ本文中の内容と対応させたか。
- 理解の到達点を「二人の記憶が一致した」としなかったか。
- 90字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 地図の見た目だけを説明せず、二人が相手の記憶とどう向き合うようになったかまで書く。

任意課題（自由記述）

考え方の例 体育祭の集合時刻について、写真から全員が門前にいたことは確かめられるが、待たされたと感じた人と、早く集まったと感じた人がいる、と分ける。

☆自己採点の観点

- 共通して確かめられる事実を一つ示したか。
- 二人の解釈の違いを、どちらか一方へ統一しなかったか。
- 100字以内にまとめたか。

第六章の学び 資料で確かめられる事実と、当事者が経験した意味を分ける。相互理解は、記憶を一つにそろえることではない。

第七章 廃坑の声

この章で身につける力 観察された事実、そこから導く推論、まだ確かめられていない仮説を分け、複数の説明可能性を保って読む。

町の資料館には、音のない写真が多い。選鉱場の歯車、黒い顔で笑う作業員、山腹へ延びる軌道。澤は写真を整理するたび、そこに写らなかった音を想像した。

鉱山が閉じてから四十年が過ぎている。坑口は封鎖され、周辺には立入禁止の柵がある。崩れや有害な水の危険があるため、資料館の職員も中へは入らない。それでも町では、雨の前になると山から「オーイ」と呼ぶ声が聞こえる、と語られてきた。

澤がその話を知ったのは、元坑員の大森に聞き取りをしたときだった。

「山が先に知らせるんだ。声を聞いたら、水路を見ろってな」

「誰かの声なんですか」

「誰のものか決めたら、話は小さくなる」

大森はそれ以上説明しなかった。

聞き取り票には、話を事実記録と同じ欄へ書かず、「大森がそう語った」として残した。

大森がうそをついているという意味ではない。誰がいつ何を聞いたかを確かめられる記録と、長く語られてきた経験とでは、資料として示せる範囲が違うからである。

澤は、地域の音を集める企画に「廃坑の声」を加えたいと思った。ただし、伝承を怖い話として録音するだけでは、資料にならない。市の文化財担当者と、鉱山跡の排水を管理する技術者に相談し、許可された場所だけで調査することにした。封鎖区域の外に録音機を置く作業は、施設を管理する専門の職員が行った。澤は柵の手前で、時刻、天気、聞こえた方向を記録した。

最初の三日間、音はなかった。四日目の夕方、気圧が下がり、夜から雨になるという予報が出た。午後四時十二分、録音機に低い音が三度入った。

ウォー、ウォー、ウォー。

人の呼び声に似ていた。漑は画面の波形を見ながら、胸が速く打つのを感じた。

「やっぱり声だ」と言うと、技術者の西原は首を横に振った。

「記録できたのは、声に似た音が三回あったことです。原因はまだ別です」

西原は坑外の設備図を開いた。封鎖された坑道には、圧力を逃がす管と排水路がつながっている。風や水位の変化で管が鳴る可能性がある。近くの橋を大型車が通ると、地面の振動が空洞へ伝わる可能性もあるという。

さらに、録音機そのものが風を受けて生じる雑音も確かめる必要があった。西原は音を聞くだけで原因を決めず、別の位置に置いた機器の記録や、管理用の気象記録、通行時刻を照らし合わせるよう提案した。漑が一つの音へ付けたかった名前は、調べる項目の数だけ遠のいた。

漑のノートには、三つの欄ができた。「観察」「そこから考えられること」「まだ確かめること」。最初の欄に、時刻、回数、音の長さを書いた。二番目には「管を通る空気か」と書き、すぐ後ろへ疑問符を付けた。

*

翌週、漑は古い保安日誌を調べた。大雨の前に排水量が増えた記録はあるが、「声」という語はなかった。一方、三十年前の聞き取り帳には、坑内事故のあと、入口近くで仲間の名を呼ぶ習慣があったと書かれていた。別の頁には、山鳴りを聞いたなら水路を確かめたという証言もあった。

「呼び声の記憶と、設備の音が結びついたのかな」

漑が言うと、資料館長は、「可能性はある」と答えた。

「でも、昔の人がどの音を聞いたかは録音されていない。今の音と同じだとは言えないね」

最初の調査で、音の直前に橋を大型車が通ったことも分かった。漑は、原因は車の振動だと思った。ところが二回目の録音では、車が通らない早朝にも似た音が入った。その日は雨ではなかったが、強い風が谷から吹き上げていた。管のそばでは音が大きく、柵から離れると人の声らしさが薄れた。

別の位置の録音機には、同じ時刻の風の音が強く入っていた。この一致は風の説明を支えるが、管の内部でどのように音が生じたかを直接見たわけではない。漑は観察欄に二台の記録を書き、推論欄に「風との関係が強い」と記した。

「じゃあ、空気が管を鳴らしていたんですね」

「今回の音については、その説明が合いそうです」と西原は言った。「ただ、最初の三回も同じ原因だったとは、まだ決められません。車の振動と風が重なったかもしれないし、排水の状態も違います」

一つの説明が見つかったのに、答えは増えたようだった。漑は少し不満を感じた。原因を一つに定めた方が、展示は分かりやすい。

大森は録音を聞かせると、彼は目を閉じた。

「昔聞いたのと似ていますか」

「似ている気もするし、違う気もする。昔は音だけを聞いたんじゃない。雨の匂いや、夜勤へ行く仲間の顔と一緒に聞いた」

漑は、音源の一致を尋ねたのに、大森は経験のまとまりを答えたのだと気づいた。

「科学で説明できたら、『山の声』はなくなりますか」

大森は録音機を指で軽くたたいた。

「管の音だと分かれば、危ない坑道へ誰かがいるとは思わずに済む。それは大事だ。だが、声を聞いたら水路を見ると伝えた人まで、いなかったことにはならん」

展示の日、漑は音を三つに分けた。最初の三回の音、強風の日の音、橋を車が通ったときの振動音である。どれにも原因の名前を付けず、分かっている条件だけを添えた。

説明板にはこう記した。

「封鎖区域の外で、人の呼び声に似た低い音を複数回記録した。強風の日の音は、外へ通じる管を空気が通ったという説明とよく合う。最初の音については、風、車の振動、排水の状態などが関係した可能性があり、一つには確定していない。」

その隣に、保安日誌と聞き取り帳の写しを置いた。山の声が超自然的な存在の証明だとは書かなかった。反対に、設備の音だと説明すれば伝承が誤りになる、とも書かなかった。録音が示す物理的な音の問題と、町で語り継がれた言葉の役割とは、関係しながらも同じ問いではないからだ。

開館後、子どもがスピーカーに耳を近づけ、「人がいるみたい」と言った。母親が「本当にいるの？」と尋ねられて困っている。漑は、柵の中には入れないこと、録音された音には設備や風による説明が考えられることを話した。

「じゃあ、幽霊じゃないんだ」と子どもは言った。

「幽霊だと確かめた記録はないよ。でも、何の音もなかったわけでもない」

漑は再生を止めた。資料館に、短い静けさが戻った。その静けさの中で、写真に写らなかった作業員の声や、危険を伝えた人々の言葉まで聞こえた気がした。もちろん、それは録音機が記録した音ではない。

展示の題名を、漑は最後まで変えなかった。「廃坑の声」。声とは何かを一つに決めるためではなく、どこまでが観察で、どこからが推論や記憶なのかを、聞く人に確かめてもらうためだった。

設問

問一 証拠の分類

最初の録音について、本文で「観察された事実」に当たるものとして最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 雨の前に山が危険を知らせるため、人に似た声を三度発したこと。

イ 午後四時十二分、録音機に人の呼び声に似た低い音が三回入ったこと。

ウ 大型車の振動と排水の変化が重なり、坑道の管を鳴らしたこと。

エ かつて仲間を呼んだ坑員の声が、設備の内部に残って再生されたこと。

解答 「 」

問二 調査の進み方

二回目の録音によって、調査はどのように進んだか。最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 車のないときにも音が記録され、強風と管の関係は説明力を増したが、最初の音の原因は確定しなかった。

イ 大型車が音の唯一の原因だと証明され、雨や排水、風の状態をこれ以上調べる必要はなくなった。

ウ 昔の証言とほぼ同じ音が再び記録されたため、危険を伝える伝承の内容全体が科学的な事実として確かめられた。

エ 管をふさいだ後にも同じ音が生じたため、設備による原因は退けられ、超自然的な説明だけが残った。

解答 「 」

問三 二つの問い

大森が「管の音だと分かれば、危ない坑道へ誰かがいるとは思わずに済む。それは大事だ」と述べたあと、伝えた人の存在にも触れる理由として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 設備の音という科学的な説明を退け、坑員の伝承だけが山の声の本当の原因と役割を知る手がかりだと主張するため。

イ 危険を伝える伝承が残っていれば、坑道の安全管理や科学的な原因調査をあらためて行う必要はないと示すため。

ウ　音の物理的な原因を確かめることと、危険を伝えた人々の経験や言葉の役割を知することは、両立すると考えるため。

エ 山の声がかつて働いた坑員一人の声だと決め、その人物だけを記念する展示へ作り替えるよう求めるため。

解答

問四 限定を含む結論（70字以内）

最初に録音された三回の音について、本文からどこまで説明できるか。観察事実と複数の可能性を区別し、70字以内で書け。

解答欄(70字)

[illegible]

問五 題名の意味（95字以内）

題名「廃坑の声」の「声」は、物語全体でどのような二つの意味を持つか。録音と伝承の関係を踏まえ、95字以内で説明せよ。

解答・解説

本文の流れ

伝承と準備 滯は廃坑へ入らず、封鎖区域の外から安全に音を記録する。

最初の録音 人の声に似た音を観察するが、原因には風、排水、車の振動などが考えられる。

二回目の録音 強風と管の関係は確かめやすくなる一方、最初の音は一つに決まらない。

展示 物理的な音と、危険や記憶を伝えた言葉を分けながら、どちらも消さずに示す。

問一 証拠の分類

正答
イ

根拠 本文は、四日目の「午後四時十二分、録音機に低い音が三度入った」と記録する。

解説 時刻、回数、音の性質は録音と記録から確認できる。原因や目的を述べていない点が、観察事実として適切である。

誤答のずれ アは山の目的を推測し、ウは複数原因を確定し、エは過去の声の再生という未検証の説明を加えている。

☆自己採点の観点

- ☐ 記録機器が直接示すことと、その原因の説明を分けたか。
- ☐ 「声に似た音」と「人の声」を同じにしなかったか。

問二 調査の進み方

正答
ア

根拠 二回目は車のない早朝に強風があり、管のそばほど音が大きかった。ただし西原は最初の音まで同じ原因とは決めない。

解説 新しい調査は、強風と管という仮説を支える一方、別条件で生じた最初の録音には複数の説明を残す。証拠が増えても、結論の範囲は限定される。

誤答のずれ イは車だけに確定し、ウは伝承全体を事実化し、エは本文にない管の封鎖と超自然的原因を加えている。

☆自己採点の観点

- 二回目の結果が何を強め、何を未確定のままにしたかを分けたか。
- 新しい証拠が、すべての事例へ同じ説明を与えるととは限らないと捉えたか。

問三 二つの問い

正答 ウ

根拠 展示では音の条件を示すと同時に、保安日誌と聞き取り帳を置き、物理的な音の問題と、語り継がれた言葉の役割を別の問いとして扱う。

解説 大森は原因を科学的に確かめる意義を認め、そのことによって、危険を知らせた人々の経験まで無意味になるわけではないと述べる。

誤答のずれ アは科学的説明を否定し、イは安全管理を不要とし、エは声を一人に特定する点がずれる。

☆自己採点の観点

- 科学と伝承のどちらかを勝たせる選択肢にしていないか。
- 原因の問題と、語られた言葉の社会的な働きを区別したか。

問四 限定を含む結論（70字以内）

設問の意図 直接観察された内容と、原因についての複数の仮説を分け、断定を避けてまとめる。

根拠 録音の時刻・回数と、西原が挙げた管、風、排水、車の振動の可能性。

必要要素 ①低い音が三回録音された。②人の声に似るが人の声とは確定しない。③風・振動・排水など複数原因の可能性。

組み立て方 「〓は観察されたが、原因は〓の可能性があり、〓できない」とする。

模範解答

午後四時十二分に人の声に似た低い音が三回録音されたが、風が管を鳴らしたか、車の振動や排水が関係した可能性があり、原因は一つに確定できない。（69字）

別解例①

呼び声のような低音が三度入ったことは確かだが、人の声とは限らず、管を通る風、車の振動、排水の状態などが原因の候補としてなお残っている。（67字）

別解例②

録音には同時刻に三回の低音がある一方、その正体は人の声と断定できず、風や管、車の振動、排水の変化が単独または重なった可能性がなおある。(67字)

☆自己採点の観点

- 録音されたことと原因の説明を文中で区別したか。
- 超自然的原因を証明したとも、設備の音に確定したとも書かなかったか。
- 70字以内にまとめたか。

答案で注意したい点

「管を通る風の音だった」と言い切ると、強風の日の音と最初の録音を混同する。

問五 題名の意味(95字以内)

設問の意図 物理的に記録された音と、町の経験を伝える言葉という二層を、混同せず関係づける。

根拠 展示に置いた三つの録音、保安日誌・聞き取り帳、大森の説明、結末の滯の考え。

必要要素

①設備や風等による可能性を持つ、声に似た音。②危険や働いた人の記憶を伝えてきた言葉。③原因の説明は後者を消さない。

組み立て方

「一つは、もう一つは、としてではない」と限定する。

模範解答

一つは設備や風などが生んだ可能性を持つ、録音された呼び声に似た音であり、もう一つは危険と坑員の記憶を町へ伝えた言葉である。音の原因を説明しても、伝承の役割まで消えるわけではない。(89字)

別解例①

「声」は、管を通る空気や振動で生じた可能性のある物理的な音と、水路の危険や働いた人々の記憶を忘れないため語り継がれた伝承を指し、原因の解明と記憶の意味を別の問いとしてとに残す。(89字)

別解例②

録音機が封鎖区域の外で捉えた人声のような低音と、山の危険を知らせ、働いた坑員の経験を伝えてきた言葉の両方を指す。科学的に音を説明できても、伝承を生んだ人々の営みまで否定されない。(89字)

☆自己採点の観点

- 二つの「声」を分けて示したか。
- 伝承を超自然的事実の証明としなかったか。

□ 原因の解明と伝承の意味が両立する関係を書いたか。

□ 95字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「科学では説明できない不思議な声」とまとめると、本文が示した管と風の説明を落とす。

第七章の学び 観察事実に、原因や意図を自動的に足さない。新しい証拠が支える範囲を確かめ、物理的原因と伝承の役割を別の問いとして扱う。

第八章 稜線の灯

この章で身につける力 判断に至る条件と手順を時系列で捉え、恐れという感情が慎重な行動を支える場合を、物語全体から説明する。

冬の観測実習に出る朝、琴音は宿の窓から稜線を見上げた。空は淡い青で、観測小屋の標識灯が小さく光っている。大学の地理学研究会で半年かけて準備した雪面観測だった。あの灯のそばまで行けば、昨年と同じ地点の記録が取れる。

参加者は五人。山岳ガイドの島崎が先頭に立ち、顧問の安西と学生三人が続く。琴音以外の二人は、冬の山で長く歩くのが初めてだった。出発前、島崎は午後に天気が崩れる予報と、途中の確認地点で引き返す可能性を話した。

前夜の打ち合わせでは、予定を短くする条件も紙にしていた。見通しが一定の目印まで届かないこと、風が強まること、歩く速さが予定より落ちること。そのどれか一つで機械的に結論を出すのではなく、重なり方を確認地点で全員に伝える。中止を失敗扱いしないことも、安西が記録用紙へ書き加えた。

「晴れているのに？」と琴音は尋ねた。

「今見えている空と、数時間後の判断は別です。予報だけでも、今の景色だけでも決めません」

琴音は頷いたが、胸の中では、せっかく来たのだからという気持ちが強かった。共同研究の申請書には今日の日付があり、観測機器は宿から運び上げている。引き返せば、次の機会は春になるかもしれない。

琴音は研究会の代表として、日程を決め、後輩へ役割を割り振った。天候のために中止したと報告すれば、準備の甘さを問われる気がした。その不安を、出発前には誰にも言わなかった。

樹林の中は風が弱く、雪を踏む音が規則正しく続いた。琴音は時々振り返り、白い斜面の向こうに小さくなる宿を見た。後輩の陸は息を切らしていたが、「大丈夫です」と笑った。

一時間ほどすると、枝の先が激しく揺れ始めた。空の色は変わらないのに、稜線から細かな雪が流れてくる。島崎は一度隊列を止め、全員の様子と時刻を確認した。陸の歩みは遅くなり、もう一人の学生、朱里は手袋の中の指が冷えると言った。装備に問題はなかったが、余裕が減っていることは分かった。

「確認地点までは行きます。そこで条件をそろえて判断します」

島崎の声は、進むとも戻るとも言わなかった。

*

樹林を抜ける少し前、雲が山肌へ下りてきた。標識灯はまだ見えた。琴音には、朝より大きく、近く感じられた。

確認地点に着くと、島崎は全員を風の弱い場所へ集めた。見通せる距離、風の変化、残り時間、二人の経験、現在の体調。出発前に定めた条件と照らすと、複数の項目が、引き返す側に傾いていた。

「ここから戻ります」と島崎が言った。

琴音は思わず標識灯を指した。

「あそこまでなら近いです。観測だけしてすぐ戻れば」

「近く見えることと、短い時間で往復できることは同じではありません。雲の中では距離の感じ方も変わります」

「でも、まだ見えています」

言いながら、琴音は自分が何を守ろうとしているのか分からなくなった。観測計画か、準備した半年か、先輩として失敗したくない気持ちか。

そのとき、標識灯が白い雲に隠れた。消えたのではない。ただ見えなくなっただけだ。それでも、琴音の背中を恐れが走った。帰る道の目印まで同じように消える場面を想像した。

「怖いです」と、朱里が言った。

陸もうなずいた。琴音は、二人がそれまで「大丈夫」と答え続けていたことを思い出した。自分が進みたがるほど、後輩は不安を言いにくかったのかもしれない。

「私も、怖い」と琴音は言った。「戻る目印が見えなくなるのが」

島崎はその言葉を、弱音として片づけなかった。全員に、戻る判断を確認した。琴音は最後に頷いた。

戻り始めると、来たときの足跡は風に薄くされていた。島崎は先に確認してある経路をたどり、安西が最後尾から人数を確かめた。琴音は陸と朱里の間を歩いた。前へ進むときには一列の歩みが頼もしく聞こえたのに、帰りは一人でも音が途切れると不安になった。

琴音は何度も背後の白さを見たくなったが、隊列の間隔を保つことへ意識を戻した。灯を見つけるより、前の人の動きと後ろの返事確かめる方が、今は必要だった。目標から離れる歩みも、状況を見ない逃走ではなかった。

「先輩、観測できなくてすみません」と陸が言った。

「あなたのせいじゃない」

琴音は答え、それが自分自身にも向けた言葉だと気づいた。

*

樹林へ戻ったところ、雪は横から吹くようになった。視界は開けた斜面より安定したが、宿まで急いでよい状態でもなかった。島崎は予定していた下の休憩施設で行動を止め、宿へ状況を連絡した。全員の体調を確かめ、天候が落ち着くまで待つことになった。

琴音は窓のない壁にもたれた。止まっている時間が長く感じられる。何か行動した方が勇気があるように思えたが、今必要なのは、決めた場所で待ち、連絡を保ち、余計な判断を増やさないことだった。

「恐れたから戻った、でいいんでしょうか」と琴音は島崎に聞いた。

「恐れだけなら、人は急いだり動けなくなったりもします。今日は、恐れを口にしたことで、見通しや体力をもう一度確かめられた。条件と結びつけたから判断になったんです」

「私は、灯が見えていたから行けると思いました」

「灯は目標を示します。でも、そこへ進むべき時刻までは教えません」

琴音は記録用紙を取り出した。観測値の欄は空白だった。その下に、確認地点へ着いた時刻、風と視界、メンバーの状態、戻ると決めた理由を書いた。測れなかったという結果にも、経過はあった。

夕方、宿へ戻るころには稜線は完全に雲の中だった。管理人の話では、観測小屋付近では午後に風が急に強まり、作業員も外の作業を中止したという。島崎の判断が正しかったと証明するための話ではない。もし風が弱いままだったとしても、あの地点で得られた条件から戻る判断は必要だった。

翌朝、空は晴れた。稜線の灯が、昨日と同じ場所に見える。管理人から地図を見せてもらうと、灯は観測地点そのものではなく、さらに奥の設備に付いていた。角度によって近く重なるって見えていたのだ。

琴音は、灯を目指して歩く自分だけを勇気のある姿として想像していた。だが昨日、朱里が「怖い」と言わなければ、条件の変化を皆の言葉として確かめられなかったかもしれない。戻ると決めても、すぐ安全が約束されたわけではなく、帰路を確かめ、途中で待つ必要もあった。

研究会の報告書に、琴音は観測中止の経過を残した。空欄の表も消さなかった。予定した値がないことと、何も学ばなかったことは同じではない。

窓の外で、稜線の灯が朝日に薄くなった。琴音はそれを、進めと命じる合図ではなく、条件が整う日にもう一度向き合う場所の印として見た。恐れをなくすことではなく、恐れを確かめる手順の中へ置くこと。そのとき初めて、引き返す決断も、次へ進むための行動になるのだと思った。

設問

問一 判断の条件

確認地点で島崎が引き返すと決めた理由として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 標識灯が見えなくなったことから、観測小屋の設備そのものが故障し、前進できないと判断したから。

イ 琴音が強い恐怖を口にしたため、予報や視界などを確かめず、その感情だけを安全判断の基準にしたから。

ウ 予報、視界と風、残り時間、経験、体調を事前の条件と照らし、複数項目が戻る側へ傾いたから。

エ 翌日の天気は必ず晴れると分かっていたため、その日の観測を続けることには価値がないと判断したから。

解答 ー ー

問二 感情の働き

朱里と琴音が「怖い」と口にしたことの働きとして最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 不安を共有することで、変化した条件と各人の状態を言葉にし、戻る判断を全員で確認しやすくした。

イ 恐怖の方が予報や観察より信頼できると示し、今後は準備した条件を用いず感覚だけで決める考えへ導いた。

ウ 琴音だけに観測中止の責任があると明らかにし、その失敗を島崎や安西、ほかの後輩の判断から切り離した。

エ 全員が恐怖で動けなくなるのを防ぐため、島崎が標識灯へ急いで進む決断をするきっかけを作った。

解答 ー ー

問三 標識灯の働き

物語における標識灯の働きとして最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 常に正しい距離と進路を示し、経験の少ない人も安全に観測地点へ進めるよう導く。

イ 灯の見え方を通して、目標が近く見えることと、今そこへ進むべき判断とは別だと示す。

ウ 悪天候の到来を自動的に知らせ、島崎が戻ると決めた判断の正しさを証明する。

エ 観測に失敗した琴音へ、次の機会には必ず成功できると約束する希望だけの象徴となる。

解答

問四 恐れと手順（75字以内）

島崎は、恐れがどのような場合に判断を支えると考えているか。琴音たちの行動に即して75字以内で説明せよ。

解答欄(75字)

[illegible]

問五 勇気の捉え直し（100字以内）

琴音は「勇気」をどのように捉え直したか。出発時、確認地点、休憩施設での行動を関係づけ、100字以内で説明せよ。

解答欄(100字)

[illegible]

解答・解説

本文の流れ

出発 琴音は観測地点へ進み、準備した成果を得ることを勇気ある行動と考える。

条件の変化 風、視界、時間、経験、体調を確認し、標識灯が見えていても引き返す。

帰路と待機 安全はすぐ確定せず、経路を確かめ、連絡した施設で天候の回復を待つ。

報告 観測値がないことだけでなく、判断の条件と経過も学びとして記録する。

問一 判断の条件

正答
ウ

根拠 確認地点で、見通せる距離、風、残り時間、二人の経験、現在の体調を、出発前に定めた条件と照合している。

解説 灯の消失や一人の感情だけが理由ではない。予報を含む複数条件を、事前の基準に沿ってまとめた判断である。

誤答のずれ アは設備の故障とし、イは感情だけにし、エは翌日の天気を知っていたとする点が本文にない。

☆自己採点の観点

- 判断に用いた条件を複数確認したか。
- 標識灯が見えていた事実だけで、距離や安全を決められないことを捉えたか。

問二 感情の働き

正答
ア

根拠 二人が恐れを口にしたあと、島崎は全員に戻る判断を確認する。後の説明でも、恐れを条件と結びつけたから判断になったと述べる。

解説 恐れそのものを正解とするのではない。隠されていた不安を共有し、視界や体力を確かめ直す材料にした点が重要である。

誤答のずれ イは準備と予報を否定し、ウは琴音への責任追及に変え、エは前進のきつかけとする点が反対である。

☆自己採点の観点

- 感情を□にした後、どの確認が行われたかを読んだか。
- 「怖ければ常に戻る」という単純な規則にしていけないか。

問三 標識灯の働き

正答 イ

根拠 灯は近く重なって見え、観測地点そのものでもなかった。島崎は「そこへ進むべき時刻までは教えない」と述べる。

解説 灯は目標の方向を示すが、距離、時間、天候、体力を判断する代わりにはならない。琴音の思い込みを捉え直す反復表現である。

誤答のずれ アは常に安全な案内とし、ウは悪天候を知らせる装置とし、エは成功を約束する意味だけに狭めている。

☆自己採点の観点

- 朝、確認地点、翌朝で灯の見え方と意味がどう変わったかをつないだか。
- 目標の存在と、進む判断の条件を区別したか。

問四 恐れと手順（75字以内）

設問の意図 感情を肯定・否定のどちらかへ単純化せず、条件確認へつなぐ働きを説明する。

根拠 島崎の「恐れだけなら」「条件と結びつけたから判断」という説明。

必要要素 ①恐れだけでは急ぐ・動けない場合もある。②口にして共有する。③視界・体調等を手順に沿って再確認する。

組み立て方 「恐れだけで決めるのではなく、～して～するとき」と条件を明示する。

模範解答

恐れだけで行動を決めるのではなく、それを言葉にして共有し、視界や風、体力、残り時間を事前の基準と照らして確かめ直すとき、慎重な判断を支える。（70字）

別解例①

怖さを隠さず全員で共有し、その感情をきつかけに実際の見通しや体調などの条件を定めた手順で改めて確認する場合、恐れは戻る決断の材料になる。（68字）

別解例② 恐怖に任せて急いだり止まったりせず、感じた不安を正直に口にし、天候、時間、経験、体調と慎重に結びつけて検討するとき、責任ある判断を助ける。(69字)

☆自己採点の観点

- 恐れだけを判断基準にできなかったか。
- 共有と条件の再確認という手順を含めたか。
- 75字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「怖いときは必ず引き返す」では、本文の「条件と結びつける」という中心が抜ける。

問五 勇気の捉え直し(100字以内)

設問の意図 三つの時点の行動を関係づけ、前進だけでなく撤退・待機・記録を含む勇気 of 理解を説明する。

根拠 出発時の成果への固執、確認地点での発言、帰路と休憩施設、報告書の記録。

必要要素 ①初めは目標へ進み成果を得ること。②後には恐れと条件を共有して戻る。③連絡し、待ち、経過を記録することも責任ある行動。

組み立て方 「初めは〜と考えたが、〜を通して、〜も勇気だと捉えた」と変化を示す。

模範解答 初めは準備した観測を成し遂げるため灯へ進むことを勇気と考えたが、恐れと条件を共有して戻り、帰路を確かめ、連絡した施設で待つ経験から、成果を諦めて安全な手順を守ることも次へ進む勇気だと捉え直した。(97字)

別解例① 琴音は当初、目標へ進んで観測値を得る姿だけを勇気と見た。しかし視界、体調、時間を確かめて撤退し、施設で連絡を保って静かに待つことで、進まない決断を手順どおり続けることも責任ある勇気だと理解した。(97字)

別解例② 半年の準備を無駄にせず前進することが勇気だと思っていたが、恐れを口にして戻る条件を慎重に確かめ、安全が約束されない帰路と待機を丁寧に行い、その経過を残すことも次の行動につながる勇気だと考えた。(96字)

☆自己採点の観点

- 出発時の考えと、後の捉え直しを対比したか。

□ 引き返す決定だけでなく、帰路確認・連絡・待機の過程を含めたか。

□ 100字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「怖くなったので諦めた」では、条件を確かめ、戻った後も手順を続けた点を説明できない。

第八章の学び 感情と判断を対立させず、恐れを条件確認の手順へ置く。目標が見えることと、今進むべきことを区別する。

第九章 贋作の真実

この章で身につける力 複数の証拠が示す範囲と限界を比べ、事実・推論・仮説を区別しながら、真作か贋作かの二分法を越えて考える。

市立美術館の収蔵庫で、「午後の窓」は木枠から外され、白い台の上に横たわっていた。画面には、半分開いた窓と、空の椅子が描かれている。右下には、画家・香川俊一の署名がある。来月の開館五十周年展では、香川の代表作として入口に置かれる予定だった。

学芸員の弥生は、作品札の原稿を握っていた。「一九三二年、香川俊一作」。わずか一行だが、その一行が書けなくなっている。

きっかけは、額を外したときに見つかった古い紙片だった。裏板に貼られた運送票には、「香川画室 習作」と鉛筆で記されていた。香川本人の習作なのか、画室で学んだ誰かの作なのかは分からない。紙片が作品と同じ時代のものかも、まだ確認できていなかった。

「署名があるなら、本人の作品じゃないんですか」と弥生が言うと、保存修復を担当する芙美は、斜めから光を当てた。

「署名は証拠の一つ。でも、いつ、誰が書いたかまでは、見える字だけでは決まりません」署名の周囲は、ほかの部分より表面のひびが少ないように見える。だが、そこだけ過去に修復された可能性もある。ひびの違いを見て、すぐ後世の署名だと断定することはできない。

美術館は所有者から調査の同意を得ていた。ただし、まずは作品を傷つけない方法で調べる。芙美は通常の光、紫外線を含む光、赤外線による画像を順に撮影し、表面を測る機器で限られた箇所を調べた。異なる画像は、それぞれ別の層や材料の違いを示すことがあるが、一枚だけで作者名を答えるものではない。

赤外線画像には、椅子の下から細い格子が現れた。完成画では消えている。下描きを別の図から写すための線にも見える。

「模写の印ですか」

「そういう可能性はあります」と芙美は答えた。「でも、作者が構図を移すために使うことも、工房で複数人が制作するときにも使うこともある。格子がある、という観察と、贋作だ、という結論の間には段階があります」

紫外線を含む画像では、窓の周囲と署名の上が違う色に見えた。後から加えられた絵具や、修復に用いられた材料がある可能性を示す。ただし、いつの処置かは画像だけでは分からない。

弥生のメモには、確かめられたことが増えるほど、「可能性」という語も増えていった。

*

次に、作品が美術館へ来るまでの記録を調べた。寄贈者の家の台帳では、一九五八年に画商から購入したとある。画商の在庫帳には同じ大きさの作品があり、題名の欄には「窓・香川画室」と書かれていた。本人作を意味するのか、工房の作品を意味するのか、当時の書き方だけでは決めにくい。

一九六〇年代の展覧会図録には、「香川俊一《午後の窓》」として掲載されていた。しかし、その前の所蔵者を示す記録には空白がある。後の図録が同じ帰属を繰り返したからといって、最初の判断が正しかった証明にはならない。

古い写真を集めていた元館長から、額に入った作品の白黒写真が届いた。撮影年は一九五九年。画面の右下は暗く、署名があるかどうか判別しにくい。弥生は落胆したが、写真の窓枠に注目した。現在は明るい白で塗られている部分が、写真では濃く見える。

芙美が画像を比べると、現在の窓枠には、後から塗り重ねられた層がある可能性が高かった。倉庫の箱からは、一九七四年の修復報告書も見つかった。「画面洗浄、窓周辺の補彩」と記されている。ただし「補彩」が、失われた部分を補っただけなのか、見え方を広く変えたのかは詳しくない。

「後から塗られていたら、作品は偽物になりますか」と弥生は尋ねた。

「修復や補彩は、失われた見え方を整えるために行われることがあります。それと、別人の作品を本人作として売るための改変は、目的も扱いも違います。今ある層だけから、当時の意図まで決めない方がいい」

弥生は、これまで「後から加えられたもの」を一つにまとめていたことに気づいた。署名、修復、上塗りは、時期も目的も同じとは限らない。

*

香川の作品を研究する大学教員から、別の資料が届いた。香川の画室で学んだ人々が、同じ窓と椅子を描いた小作品を複数残しているという。添付された写真には、椅子の向きや窓の開き方が少しずつ違う絵が並んでいた。その一枚には格子を使った下描きがある。

研究者は、「午後の窓」が画室の共同制作か、弟子の習作だった可能性を挙げた。一方で、香川が最後に手を入れた可能性も否定できないと書いていた。当時の画室では、師の構図を学ぶために写すことと、販売する作品を手伝うことの境目が、現在の作者名の感覚ほど明確でない場合がある。

表面の材料を調べた結果も届いた。主な絵具は、香川が活動した時期にも使われていたものと矛盾しなかった。ただし、それらは香川だけが使った材料ではない。署名付近には、より後の時期にも広く使われた材料が含まれる可能性が示されたが、それが署名の線そのものか、過去の補修層かは、非破壊の測定だけでは分離できなかった。

「本人作だという証拠は弱くなりました」と弥生は言った。

「そうですね。でも『誰かがだますために作った贋作』という証拠が強くなったわけではありません」と芙美が答えた。

「では、何が分かったんでしょう」

芙美は調査表を指した。

「本人の単独作として確定できないこと。画室と関係する可能性が高いこと。構図が同じ場所で共有されていたこと。後の修復や帰属の変化が、今の見え方と名前を作ってきたことです」

作者名が一つから未定へ戻ったのに、作品について分かることは増えていた。

*

展覧会の会議で、館長は入口作品の変更を提案した。

「周年展で疑わしい作品を目玉にするのは危険だ。収蔵庫へ戻し、調査が終わってから出そう」

弥生は、以前なら賛成したかもしれない。誤った名前を掲げることは避けなければならない。しかし、収蔵庫へ戻せば、確実な名がない作品には価値がないという印象も残る。

「調査の途中を展示できませんか」と弥生は言った。「香川作だと断定せず、贋作だとも断定しない。どの証拠が何を示し、何を示さないかを見てもらうんです」

館長はしばらく考え、「作品札を一行で済ませないこと」を条件に認めた。

弥生は札を何度も書き直した。最終的には、こうなった。

「《午後の窓》 一九三〇年代頃。香川俊一の画室に關係する作者による可能性がある。香川本人の単独作とは現在の資料から確定できない。署名と窓周辺には、制作後の加筆または修復とみられる部分があり、時期と目的を調査中。」

その下に、赤外線画像、運送票、修復報告書、画室の類似作品を並べた。それぞれに、「観察されたこと」「考えられる説明」「この資料だけでは決められないこと」を記した。開幕の日、一人の来館者が札を読み、「結局、本物なんですか、偽物なんですか」と尋ねた。

弥生は、すぐ答えられる言葉を探しそうになった。だが、作品の前で立ち止まった。

「香川本人が一人で描いたと確定はできません。ただ、画室で生まれた可能性や、その後の修復と名前の変化は、複数の資料から見えてきました。だますための贋作だったとも、今は言えません」

来館者はもう一度、空の椅子を見た。

「名前が分からなくても、絵はここにあるんですね」

弥生は頷いた。作品の真実とは、正しい作者名を一つ見つければ終わるものではない。誰がどこまで描いたか、後の人が何を加え、どの名で見えてきたか。その重なりを、分からない部分ごと示すこともまた、作品を守ることなのだ。

窓の絵に午後の光が映り込んだ。署名は消さず、しかし答えとしても扱わず、画面の一部に残っていた。

設問

問一 証拠の限界

赤外線画像に見えた格子から、本文中で直接言えることとして最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 香川本人が自分の過去作の構図を正確に写す目的で、下描きに格子を使ったこと。

イ 弟子が香川をだますため格子を使って構図を写し、完成後に香川の署名を故意に加えたこと。

ウ 格子を用いた作品はすべて弟子が工房で作ったため、香川本人の単独作ではないと分かること。

エ 現在の絵の下に格子状の線があり、構図を移すなど複数の制作過程が考えられること。

解答 〔 〕

問二 証拠の評価

材料の調査結果が作者名を確定できない理由として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 主な絵具は当時の使用と矛盾しないが香川だけの材料ではなく、署名付近の材料も補修層と分離できないから。

イ 作品を傷つけない調査では、絵具の種類や使われた時代について、確かなことは何一つ知ることができないから。

ウ 香川が使った絵具の詳細な記録は完全に残っているが、調査機器が古く、得られた結果を正しく読み取れなかったから。

エ 署名付近から当時にはない材料が検出され、補修層の影響とも区別できるため、署名が後世の偽造だと証明されたから。

解答 〔 〕

問三 作品札の判断

弥生が最終的な作品札で「香川本人の単独作とは現在の資料から確定できない」としたことの意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 作者が確定していない作品には価値がないため、調査展示を終えた後には処分する可能性を示した。

解答欄（105字）

解答・解説

本文の流れ

疑問の発生 運送票と署名の状態から、香川の単独作という従来の帰属が揺らぐ。

画像と記録 格子、後の層、画商台帳、修復記録は、制作と後世の変化を示すが、作者名を一つに決めない。

画室との関係 類似作と材料調査から画室との関係は強まるが、共同制作や弟子作など複数の可能性が残る。

展示 真作・贋作のどちらにも断定せず、各証拠が示す範囲と未確定な点を作品札で公開する。

問一 証拠の限界

正答

エ

根拠 画像には椅子の下から格子が現れるが、芙美は模写だけでなく、作者による構図移しや工房での共同制作も挙げる。

解説 直接観察できるのは格子状の線である。制作主体や目的は、ほかの資料と組み合わせ検討する推論・仮説に当たる。

誤答のずれ アは香川本人と目的を確定し、イは弟子の欺く意図まで加え、ウは格子のある全作品を工房作と一般化する。

☆自己採点の観点

- ☐ 画像に写った形と、その形について考えられる説明を分けたか。
- ☐ 一つの特徴から作者や意図を確定していないか。

問二 証拠の評価

正答

ア

根拠 絵具は香川の時代と矛盾しないが固有ではなく、署名付近のより後の材料も、線そのものか補修層か分離できない。

解説 材料調査は制作時期や層の違いを絞るが、材料が共有され、層が重なる場合には、作者名や署名時期まで一義的に示さない。

誤答のずれ イは非破壊調査で何も分からないとし、ウは完全な記録と機器不良を加え、エは偽造を証明したとする点がずれる。

☆自己採点の観点

□ 調査で分かったことと、方法上分けられなかったことの両方を確認したか。

□ 「時代と矛盾しない」を「香川作の証明」と読み替えなかったか。

問三 作品札の判断

正答

エ

根拠 作品札は、香川の単独作を確定せず、画室に関係する可能性、制作後の加筆または修復、調査中という範囲を示す。

解説 弥生は作者名を空白にするだけでなく、複数の証拠から分かった過程を公開する。未確定であること自体も、現在の知見として明示している。

誤答のずれ アは作品を無価値として処分し、イは従来の帰属を維持し、ウは贋作と制作時期を断定する点が本文にない。

☆自己採点の観点

□ 作品札の一つ一つの限定語に注目したか。

□ 「分からない」だけでなく、どこまで分かったかを示す判断だと捉えたか。

問四 事実・推論・仮説（80字以内）

設問の意図 署名付近の複数の観察事実と、時期・目的について残る説明可能性を区別する。

根拠 ひびの少なさ、画像上の違い、より後の材料の可能性、補修層と分離できないという説明。

必要要素 ① ひびや画像・材料に周囲との差がある。② 後世の署名または補修・加筆が考えられる。③ 線の時期や人物・目的は未確定。

組み立て方 「〓は観察されたが、〓かは〓ため確定できない」とする。

模範解答

署名の周囲はひびが少なく、画像や材料にも差がある可能性が示されたが、後世の署名か、修復や補彩の層による違いかを分離できず、書いた人物と時期は確定しない。(76字)

別解例①

署名付近に表面と材料の差が見られることは事実だが、それが後から署名された跡か、過去の補修が重なった結果かは判別できず、誰がいつ記したかは仮説のままである。(77字)

別解例②

署名付近には周囲と異なる層がある可能性が示されたが、その層が署名の線そのものか過去の修復部分かは非破壊測定で分けられず、後世の偽造とはまだ断定できない。(76字)

☆自己採点の観点

- 観察された差と、その原因の説明を分けたか。
- 後世の偽造と断定せず、修復等の可能性を残したか。
- 80字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「新しい材料があるから偽の署名だ」とすると、測定範囲と層を分離できないという限界を落とす。

問五 「真実」の意味(105字以内)

設問の意図 作者名の確定だけでなく、制作・修復・帰属の歴史を証拠の限界ごと示すことを主題としてまとめる。

根拠 画像、台帳、類似作、修復記録、材料調査と、弥生の作品札・来館者への説明。

必要要素 ①証拠は画室との関係や後の加筆を示す。②単独作・贋作のどちらも確定しない。③分かった過程と限界を展示することが作品を守る。

組み立て方 「〳を一方へ決めるのではなく、複数証拠から〳を示し、〳も含めて公開する理解」とする。

模範解答

複数の証拠から、香川の画室との関係や後の修復・加筆は見えても、本人の単独作とも欺くための贋作とも確定しない。作者名を一つへ決めず、制作と帰属が変化した過程を、証拠の限界ごと展示することを作品の真実として表す。(104字)

別解例①

真実とは署名に従って真作とすることでも、疑いから贋作と切り捨てることでもない。複数資料が示す工房制作や後世の処置の可能性を比べ、分かる範囲と未確定な点を明記して、作品が現在の姿と名前を得た歴史を広く示すことだ。(105字)

別解例②

調査は作者名を確定できないが、画室で共有された構図、後の補彩、帰属の反復を明らかにする。真作か贋作かの二択を急がず、証拠が支える過程と残る仮説を来館者へ広く公開することも、作品を守り深く理解する真実だと示す。(104字)

☆自己採点の観点

- 香川作にも贋作にも断定しなかったか。
- 複数の証拠が明らかにした制作・修復・帰属の過程を含めたか。
- 展示判断がなぜ作品理解につながるかを書いたか。
- 105字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「作者が分からなくても絵には価値がある」だけでは、どの証拠からどの歴史が見えたかが不足する。

第九章の学び 一つの特徴から作者や意図を決めない。複数の証拠を比べ、確定できないことも現在の知見として明示する。

第十章 学校と未来

この章で身につける力 複数の人物の立場と反復される表現を結び、記録が残すものとこぼすものを踏まえて、物語全体の主題を説明する。

四月の始業式で、校長は青葉中学校が年度末に閉校すると告げた。生徒数が減り、隣の学校と統合される。来年の四月、この校舎に中学生は通わない。

体育館では、雨の音だけがしばらく続いた。遙は校歌の額を見上げた。額の角は黒ずみ、金色の文字は一部かすれている。毎日見ていたはずなのに、閉校と聞いた途端、すべてが消える前のものに見えた。

教室へ戻ると、担任の大槻が段ボール箱を一つ置いた。側面に「記録」と書いてある。

「一年かけて、学校の資料を選ぶ。市の資料館へ渡すもの、次の学校で使うもの、処分するもの。生徒にも参加してほしい」

莉奈はすぐ手を挙げた。

「全部、写真に残せばいいと思います」

「全部って、どこまで？」と圭太が尋ねた。

「机も、黒板も、廊下の傷も。なくなってから後悔しないように」

圭太は窓の外を見た。遙は莉奈の意見に近かった。撮った写真があれば、学校が確かにあったと証明できる気がした。

放課後、三人は記録係になった。最初の写真は三年二組の黒板だった。日直が書いた四月十七日という日付を、莉奈は消さずに撮った。

「毎日の数字も残るといいね」

翌朝、その日付は新しいもの変わった。遙は、消すことも学校の毎日だったのだと思った。

*

六月、記録係は倉庫を開けた。優勝旗、古い時間割、壊れた顕微鏡、文化祭の看板。莉奈は端から撮影し、ファイル名に番号を付けた。箱はすぐ三つになった。

用務員の田辺は、卒業生でもある。棚の奥から木の札を出した。片面に「図書室」、裏に薄く「裁縫室」と書かれている。

「部屋の使い方が変わるたび、札を裏返したんだ」と田辺は言った。「建物が同じでも、学校はずっと同じじゃない」

莉奈は両面を撮った。遙は、何年変わったのか尋ねた。田辺は首をかしげた。

「覚えてないな。覚えているつもりのこと、記録と合わないことがある」

圭太は、箱の中の合唱祭プログラムを見ていた。二年前の日付で、二年一組の欄だけ空白になっている。学級閉鎖で参加できなかった年だった。

「この紙、残す？」

「もちろん。合唱祭の資料だから」と莉奈が答えた。

「歌ってないのに？」

「参加できなかったことも記録でしょう」

圭太は紙を箱へ入れたが、何も言わなかった。

七月、全校生徒から「残したい学校の風景」を募集した。集まった写真は、桜の校門、運動会、笑う友人、夕日の差す廊下が多かった。どれも美しかった。遙は展示の並びを見ながら、雨の日や、誰もいない保健室や、試合に負けたあとの写真がないことに気づいた。

「撮りたいものを集めたんだから、明るい写真が多くていいんじゃない？」と莉奈は言った。

「いいけど、これだけが学校だったみたいに見える」と圭太が答えた。

「閉校記念なのに、嫌な場面を並べたいの？」

「嫌な場面じゃない。写ってない人がいるって話」

圭太の姉は三年前、この学校へ通えない時期が長くあった。遙は知っていたが、そのことを記録へ入れるべきかは、本人以外には決められないと思った。

大槻は、二人の間に答えを置かなかった。

「記録は、選ばないと作れない。でも、選んだことを隠すと、残ったものが全部だったように見える。何を集め、誰が選んだかも書いておこう」

展示の入口に、「全校生徒から応募された写真のうち、記録係が選んだ四十点です」という札が加わった。

*

九月、遙たちは卒業生への聞き取りを始めた。校庭の桜を植えたという人が三人いた。それぞれ年代が違い、どの桜を指すかも一致しない。創立直後からあると言う人も、台風のと植え直したと言う人もいた。

田辺が保存していた工事図面には、二度の植え替えが記されていた。しかし、誰が苗を運んだかまでは書かれていない。

「三人とも、間違いないんですか」と遙が聞くと、大槻は言った。

「図面と合わない部分はある。でも、植えたと覚えていることまで、なかったとは言えない。別の木かもしれないし、土を運んだことが、年月の中で『植えた』という記憶になったのかもしれない」

遙は聞き取り記録に、図面で確かめられた年と、三人の証言を並べた。一つを正しい物語に選ぶのではなく、何が一致し、何が違うかを示した。

十月、統合後の校舎で使う物を決める会議があった。校歌の額、歴代校長の写真、部活動の記録。新しい学校には、二校分をすべて飾る場所がない。

莉奈は、青葉中の名前が消えることに腹を立てた。

「場所がないなら作ればいい。捨てたら、向こうの学校に吸収されたみたいになる」

圭太は、「物が多い方の学校が勝つわけじゃない」と言った。

「じゃあ、何を残せば負けないの？」

その問いに、誰も答えられなかった。

統合準備委員会は、校歌の額を資料館へ渡し、新校には二校の歴史を読める端末を置くとした。決定に納得しない卒業生もいた。遙自身も、体育館から額が外された跡を見ると、正しい選択だったと言い切れなかった。壁には、周囲より白い長方形が残った。

莉奈はその空白を撮った。

「なくなったところも、残るんだね」と言った。

*

十二月、記録係は最後の展示案を作った。莉奈の写真、圭太が集めた空白のある資料、遙の聞き取り記録。入口には段ボール箱を置き、来場者が「残したいこと」と「記録に見つからなかったこと」を別の紙へ書くようにした。

最初、二つの箱のうち「残したいこと」ばかりが埋まった。給食の揚げパン、先生の口ぐせ、秘密の近道。数日後、もう一つの箱にも紙が入り始めた。「転校して最後までいなかった」「保健室から聞いたチャイム」「名前を覚えてもらえなかった」「台風で中止になった文化祭」。

圭太は、姉に展示のことを話した。姉は来場せず、短い文だけを送った。

「通えなかった日も、私の学校生活だった。でも、詳しく展示する必要はない。席が空いていた日があったことだけ、消さないでほしい。」

三人は話し合い、姉の文をそのまま掲示せず、本人の同意を得て、欠席者の出席を前提にしない説明を合唱祭の資料へ付けた。「この年、参加できなかった学級と生徒がいる。理由は一つではない。」

莉奈は、初めに撮った明るい写真を外さなかった。圭太も、暗い資料だけへ置き換えようとはしなかった。学校の記録を正直にするとは、楽しかった記憶を疑うことでも、苦しかった経験を代表にすることもない。どちらかだけで全体を語らないことだった。

*

三月、最後の登校日が来た。教室の黒板には、日直が「三月二十四日」と書いた。莉奈は四月と同じ角度から写真を撮った。

卒業式のあと、生徒たちは机を運び出した。廊下から物が減るたび、声が遠くまで響いた。田辺は図書室の札を外し、遙へ見せた。

「資料館へ持っていきますか」と遙が聞いた。

「札はね。でも、裏返して使った人の迷いまでは、札だけじゃ残らない」

田辺は、箱の目録に「図書室・旧裁縫室札」と書き、使用年代は不明と添えた。分からないことを空欄のままにせず、「不明」と記した。

閉校式で、校長は「青葉中の伝統を未来へ受け継ぐ」と述べた。以前の遙なら、受け継ぐとは大切な物をできるだけ多く運ぶことだと思っただろう。今は、何を残すか決め、そのために何が外れたかも忘れないことだと考えた。

生徒が帰ったあと、遙、莉奈、圭太は教室へ戻った。黒板の日付が残っている。

「これも撮る？」と圭太が尋ねた。

「もう撮ったよ」と莉奈は答えた。それから黒板消しを持った。「でも、次に使う人はいないんだよね」

誰も消そうとしなかった。

遙は窓を開けた。春の風が入り、黒板の隅に残った白い粉が少し動いた。このまま日付を残しても、建物の改修が始まれば消える。消さなければ記憶を守れるわけではない。

遙は黒板消しを受け取り、日付の下半分をゆっくり消した。莉奈が上半分を消し、最後に圭太が、空いた面を端まで拭いた。黒板は、始業前の朝のようになった。

「何もないね」と莉奈が言った。

「何でも書ける、とも言える」と圭太が答えた。

遥は、空白を希望と呼ぶだけでは足りないと思った。新しい学校で書かれるもののために、消された日付があった。未来は過去をそのまま運ぶ場所ではなく、残した記録と、記録からこぼれたものの両方を知りながら、次に何を書くかを選ぶ場所なのだ。

三人は最後の箱を閉じた。側面には「記録」とあり、その下に小さく、「選んだ人 三年二組記録係」と書いてある。箱の中には、学校のすべては入っていない。入らなかったものがあると分かる言葉だけは、忘れずに付けた。

廊下へ出ると、外した校歌の額の跡が白く残っていた。遥は写真を撮らなかった。撮らなと決めたことを、目録の余白へ記した。そして、新しい学校で最初に作る記録係の箱には、何と書こうかと考えながら、校舎の扉を閉めた。

設問

問一 人物の立場

記録に対する莉奈と圭太の立場の違いとして最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 莉奈は明るい記憶をできるだけ多く残そうとし、圭太は選ばれた記録から外れる人や出来事にも注意を向ける。

イ 莉奈は紙の資料だけを事実として信用し、圭太は写真だけが、学校で起きたことを正確に残せると考える。

ウ 莉奈は新しい学校の記録を優先して残し、圭太は青葉中の物を一つも移さず校舎内に保存するよう求める。

エ 莉奈は残す価値のない記録を処分したいと考え、圭太は姉の経験を本人の同意なく詳しく公開して空白を補おうとする。

解答 「 」

問二 反復される空白

本文で、合唱祭プログラムの空欄、校歌の額を外した跡、最後の黒板などの「空白」が持つ働きとして最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 資料の空白は不足にすぎないので、残った写真や証言から内容を想像して補い、誰もが納得する完全な記録にすべきだと示す。

イ 過去の記録をすべて消すことで、新しい学校が以前の制約から自由に始められるという、統合の利点だけを強調する。

ウ 記録や物が残っていないとしても、学校で起きたことは卒業後も全員の記憶に、同じ内容と意味のまま保存されると示す。

エ 見えなくなった人・出来事や、次に書かれる可能性を同時に示し、消失を単純な終わりや希望のどちらにも決めない。

解答・解説

本文の流れ

四月 閉校が告げられ、莉奈はすべてを写真に残そうとする。

夏 明るい応募写真の外に、写らない人や中止・欠席の経験があると気づく。

秋から冬 資料と証言の不一致、展示する範囲、本人の同意を考え、選択の条件を明記する。

三月 黒板を消し、選んだ人を箱に記し、撮らなかった空白も目録へ残して次の学校へ向かう。

問一 人物の立場

正答
ア

根拠 莉奈は明るい応募写真を肯定し、できるだけ多く残そうとする。圭太は空欄の資料や「写ってない人」に注目する。

解説 二人は記録に賛成か反対かで分かれるのではない。残す量と明るい記憶を重視する立場と、選択によって見えなくなる経験を意識する立場の違いである。

誤答のずれ イは媒体の対立、ウは新旧校の優先を逆にし、エは莉奈の処分意思と圭太の無断公開を加えている。

☆自己採点の観点

- 二人とも記録係として残す作業をしていることを踏まえたか。
- 一つの台詞でなく、夏から冬を選択を比べたか。

問二 反復される空白

正答
エ

根拠 空欄のプログラムは参加できなかった人を、額の跡は失われた物を、消した黒板は次に書ける面と、消された日付の両方を示す。

解説 空白は欠落が見えるようにし、同時に新しい記録の余地にもなる。ただし遥は空白を希望だけとは呼ばず、消されたものを忘れない。

誤答のずれ アは想像で補完し、イは消去を利点だけにし、ウは全員に同じ記憶が残るとする点がずれる。

☆自己採点の観点

- 三つ以上の空白の場面をつないだか。
- 空白を喪失だけ、または希望だけに限定しなかったか。

問三 記録係の変化

正答 ウ

根拠 大槻は、何を集め、誰が選んだかも書くよう促す。結末でも、箱に学校のすべては入っていないと述べる。

解説 作成者名は権威を示す署名ではなく、記録が特定の人の判断によって選ばれたことを公開し、範囲と限界を後世へ伝える表示である。

誤答のずれ アは唯一の歴史を確定し、イは所有権を移し、エは漏れたものを不要と判断したとする点がずれる。

☆自己採点の観点

- 「記録」と「選んだ人」が同じ箱に書かれる意味を考えたか。
- 記録係の責任を、内容の正しさの保証だけにしなかったか。

問四 記録と選択（80字以内）

設問の意図 記録には選択が必要であり、その条件を明示することが、残らないものへの誤解を防ぐと説明する。

根拠 写真展の入口札、二つの投書箱、姉の文の扱い、最後の箱の作成者表示。

必要要素 ①すべては残せず選択が必要。②誰が何をどう集めたかを示す。③記録外の経験がなかったと誤解させない。

組み立て方 「〳は避けられないため、〳を明記し、〳と見せないこと」とする。

模範解答

記録では資料を選ぶことは避けられないため、誰がどの範囲から何を基準に選んだかを明記し、残らなかった人や出来事が存在しなかったように見せない必要があるということ。

別解例①

すべてを保存できない以上、選択した人、募集範囲、資料の条件を公開し、残った内容だけを学校生活の全体だと受け取らせず、記録外にも多様な経験があると示す必要がある。

(80字)

別解例②

記録は誰かの判断で一部を残すものなので、作成者と選び方を明記し、明るい写真や現存資料に含まれない人や出来事まで、初めからなかったものにしないことが求められる。

(79字)

☆自己採点の観点

- 選ぶこと自体を否定しなかったか。
- 作成者・範囲・基準のうち必要な条件を示したか。
- 記録から漏れたものへの配慮を含めたか。
- 80字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「全部を記録するべきだ」では、本文が示す空間・同意・選択の制約に答えていない。

問五 未来の意味(110字以内)

設問の意図 三つの終盤の行動をつなぎ、保存量ではなく、選択と欠落を自覚して次へ進むことを主題として説明する。

根拠 黒板を三人で消す場面、記録箱の表示、額の跡を撮らず目録へ記す結末。

必要要素 ①黒板を消して次の記入余地を作るが、消えた日付を忘れない。②箱に作成者を示し、すべてでないと認める。③撮らない選択も記録する。④次の学校で選び続ける。

組み立て方 「過去を全部運ぶのではなく、くを残し、くも明示して、次にくすること」とまとめる。

模範解答

過去をすべて保存して運ぶのではなく、黒板を消して次に書ける面を作りつつ消えた日付を覚え、記録箱には選んだ人を、目録には撮らなかった空白を残すことで、選択と欠落を自覚し、次の学校で何を記すか自ら考え続けること。(103字)

別解例①

遙は、物を多く残すのではなく、黒板を消して未来の余地を開きつつ、箱には選んだ人を、写真にしなかった額の跡も選択として目録へ残すこと、つまり記録の外側も意識しながら次の記録を自ら選び続けることが継承だと考えた。(103字)

別解例②

黒板を空白にするのは次へ書くための選択である。学校のすべてでない箱に選者を明記し、撮らなかつた額の跡も目録へ残すように、残したものとこぼれたものを知りながら、未来の記録を自ら作り続けることが継承だと理解した。(104字)

☆自己採点の観点

- 黒板・記録箱・撮らなかつた空白の三つを関係づけたか。
- 未来を、過去の消去や希望だけで説明しなかつたか。
- 選択と欠落への自覚を含めたか。
- 110字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「思い出を保存し、新しい学校でも忘れない」だけでは、誰が何を選び、何がこぼれたかを示す本文の中心が抜ける。

任意課題（自由記述）

考え方の例 商店街の閉店記録として看板と店主の聞き取りを残す。ただし利用者全員の思いは分らないと記し、展示札に募集期間と編集者名を明示する。

☆自己採点の観点

- 具体的な資料を一つ以上示したか。
- その資料だけでは分らない範囲を示したか。
- 誰が選んだか分かる方法を含めたか。
- 110字以内にまとめたか。

第十章の学び 記録を、過去の完全な保存と考えない。残す価値と選択の限界を同時に示し、記録の外にある経験を忘れずに次の選択へ進む。

奥付

書誌・利用について

書名 『現代文問題集第二冊 物語と表現を読む』

役割表示 標準・心情から主題へ

版表示 2026年8月 改訂完成版

著作・編集・発行 和会塾（なごらいじゅく）

ウェブサイト <https://kokugo-senka.top/>

利用について

個人での学習のための印刷、および学校・学習支援の場における非営利の授業利用を認めます。

教材データそのものの再配布、販売、ウェブサイト等への転載、および改変したものの配布はご遠慮ください。

誤植や表示上の不具合、配布・利用についてのご相談は、和会塾ホームページのお問い合わせフォームからお知らせください。

© 2026 和会塾